
アリスとコオロギ

仲村 歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アリスとコオロギ

【Nコード】

N5795T

【作者名】

仲村 歩

【あらすじ】

街にはクリスマスソングが流れ

イルミネーションや色とりどりのオーナメントが光り輝き
赤・白・緑のクリスマスストーリーロールのリボンで彩られる
歳の差・でこぼこコンビのクリスマスラブストーリー

*ホームページにて公開しています。

街

またバイト先を首になった。

仕方なく重い足取りでアパートに帰る。

目の前には、朝までであったはずの木造2階建てのアパートが跡形も無く。

真っ赤な大型車両の赤色回転灯の光が夕焼けのオレンジ色の空と相まって綺麗にクルクルと回っている。

きな臭い匂いが辺りに立ち込め。

所々から水蒸気の湯気がユラユラと上がり。

全ての物が真っ黒な炭になり。

僕の住んで居たアパートは雨上がりの木炭の林と化していた。

「燃えちゃった……何もかも全部……」

日が暮れて……

途方に暮れて……

心が折れて……

僕は街を彷徨っていた。

実家に電話すべきか人生の岐路に迷いながら赤信号の交差点で立ち止まり。

僕が携帯をポケットから取り出すと師走の街を急ぎ足で行きかう人が僕の背中にぶつかつた。

その拍子に携帯を落としそうになった。

「うわぁ、わぁ、わぁ、あっ！」

携帯がクルクルとお手玉の様に器用に回って、何とか掴んだと思った瞬間。

バナナの皮を踏んで転ぶコントの様にあり得ない位見事にスルツと携帯が手からすり抜け。

綺麗な孤を描きながら道路に落ちた。

そこにジャストミートのタイミングで大型トラックが走りぬけた。

「はあ」

地面に着きそうなくらいガツクリと肩を落として道路を見ると粉々になったプラスチックと基板がアスファルトにへばり付いて車のヘッドライトに照らされてキラキラと光っていた。

「最悪だ……これで大好きな携帯小説を読む事も書く事も出来なくなっちゃた」

どの位歩き回っていたのだろう、気が付くと大きなデパートのショーウィンドーの前で立っていた。

ショーウィンドーの中には12月と言う事もあって。

赤・白・緑のクリスマスストリコロールのリボンやスポットライトでキラキラと輝くオーナメントで綺麗にディスプレイされていた。

「これから、どうしよう」

歩き疲れて、全身から力が抜けショーウィンドーを背に歩道に崩れ堕ちて座り込んだ。

北風が空っぽになった僕の体を通り抜ける。

抜け殻の僕は寒ささえも感じなかった。

雑踏の足音のリズムと共に「なにあれ」「ふふふ」「嫌だあ」などとBGMの様に聞こえてくる。

虚ろな目で財布を見ると給料日前という事もあり青い顔をした野口英世が2枚と小銭が少しだけ入っていた。

「僕？」

「おい聞こえないのか？ 僕？」

遙か彼方の頭上から声がして。

見上げると濃紺の制服を着た国家権力を持った男の人が2人困り顔で僕を見下していた。

「君は未成年だよな？」

「いいえ、違います」

「それじゃ、署まで来てもらえるかな？」

「なぜですか？ 僕は未成年じゃないって言っているのに」

「とりあえず身元を確認したいから」

身元確認なんて冗談じゃないと思い財布に入っている免許証を差し出した。

すると濃紺の制服を着た国家権力を持った男の人が僕の免許証を手に取り穴が開くくらい見ていた。

「じいのきすすむ香乃木 進君？ 20歳??」

「これ本物？」

失礼極まりない国家権力の横暴である。

僕、香乃木 進・20歳は確かに、身長が161センチと大きいほうではなく。

どうしようもないくらい母親似の童顔ですが、この小柄な体とこの童顔で20年間社会の荒波に乗って生きてきたんです。

そしてあなたが手に持って居るのはあなた方のお仲間が発行した真正銘の本物です。

「寒くなるから気をつけて家に帰りなさい」

そんな言葉を残して雑踏の中に紛れて消えた。

家に帰れ？

あんな木炭の林になってしまった家に？

あんな所で一晩寝たらどこかの炭塗り祭りも真っ黒なじゃない真っ青になるくらい黒くなって。

また、濃紺の制服を着た国家権力を持った人にお世話になるのが落ちだろ。

そんな事を考えているとまた人の声がBGMの様に聞こえてきた。

「編集長、帰りますよ」

「なーに言っている？ 朝まで飲むぞ！」

「明日は休日出勤で早いですから、帰りましょう。ね？」

「帰りたい奴は帰れ！ 飲みたい奴は俺について来い！」

師走の週末だから人が多くって濃紺の制服を着た国家権力を持った

人達が巡回している訳か。

忘年会かあ、僕には関係ないや。

ん？誰かに見られている気がする。

誰？　そう思い顔を上げると僕の顔から5センチくらい離れた所に女の人の顔があつた。

「うわあー」

思わず声を上げて仰け反ってしまった。

心臓の鼓動が一気にレッドゾーンまで跳ね上がり心臓が口から飛び出しそうになり思わず僕は手で口を押えた。

その女の人は、彼女の性格を現すような綺麗にピシッとアイロンが掛けられた青いストライプのシャツにダブルストライプのグレーのスーツを着て。

アイボリー色のカシミアの軽くて暖かそうなコートを羽織り、膝を抱えて僕の目の前にしゃがみ込んでいた。

漆黒の長い髪の毛がウインドーのイルミネーションの光でキラキラと輝いていて、鼻筋が通った端正な顔つきで瞳は少し酔っている所為なのか潤んでいる。

茶色がかった切れ長な瞳は今にも吸い込まれそうだった。

少しふつくらとした唇には綺麗なピンクのリップが塗られ小首をかしげて微笑みながら僕の顔を覗き込んでいた。

「僕、何をしているの？」

「放っておいてください」

「男の子がそんな顔して情けないぞ」

段々腹が立ってきた。理由は判らないけれど情けないと言われて自分に腹を立てていたのかもしれない。

堪らない気持ちになり少し奥歯を噛み締めて女の人から視線を外した。

「こんな所に座り込んで寒くないの？　家に帰らないとお家の人心配するぞ」

「心配する人なんて居ません。アパートは真っ黒焦げになって帰る

家なんてありません」

これ以上構われるのが嫌で少し強い口調で目の前の女の人に面と向って言い放った。

すると女の人がつこり笑って僕の鼻を摘んだ。

体も心も冷え切っていた所為か彼女の指がとても温かった。

「なんだ、帰る家が無いのなら無いつて言えば良いのに。私は有栖ありす川がわまどか円。円周率の円と書いてまどかよ。君は？」

「僕は、香乃木 進。20です」

「えっ、コオロギ君は20歳なの？ 未成年かと思った。それじゃお酒飲めるんだ」

「はい、一応。あまり強くは無いですけれど。それに僕の名前はコオロギじゃなくて香乃木、コ・ウ・ノ・ギです」

「それじゃ、コオロギ君。行くわよ」

そう言つと円と名乗る女の人が立ち上がった。

呆れて無視すると腰に手を当てて左足を少し前に出し首を少しだけ傾けて強い口調で僕に命令した。

「男の子がグズグズしない。直ぐに立つ！ 殴るぞ」

「うわあ、せ、背が高い……」

「何か文句か？ 女が173cmあつたらおかしいか？」

「……………」

生まれ付いての末っ子長男気質の僕は女の人に強く言われると言いつ返すことが全く出来ない。

渋々立ち上がると円さんが僕の首に腕を回して引つ張ってきた。

円さんは僕より背が高く、引つ張られるとちょうど円さんの胸に僕の顔が当たって何かとても柔らかい物を頬に感じた。

「有栖川さん、止めてください。顔に胸が当たっていますよ」

「気にしない、気にしない。それと私の事は円まどかつて呼びなさい。今度、苗字で呼んだらぶつ飛ばすからね」

「それじゃ、円さん。円さんは気にならないかもしれないけれど僕が気になるんです」

恥ずかしさで自分の顔が真っ赤になっているのが良く判った。

すると円さんが僕の顔を覗き込んだ。

「キヤー、コオロギ君の顔真っ赤か。可愛い！」

そう叫んで円さんは更に腕に力を入れた。

「だ、だから、柔らかい物が……」

僕の言葉なんてまるつきり無視して有栖川　円さんは僕の首に手を回したまま、僕を拉致した。

マンション

バイト先を首になりアパートが全焼して携帯が粉々に砕け散り。

酔っ払いの有栖川 ありすがわまどか 円さんに拉致された翌朝。

僕は見慣れない部屋のソファアの上で目を覚ました。

起き上がると頭が少しガンガンする。

フラフラとした足取りでキッチンに向かい、とりあえず水を一気飲みした。

溜息混じりに深呼吸してシンクに凭れ掛かって昨夜の記憶を手繰り寄せる。

円さんに出会って、その後で居酒屋に連れて行かれてビールを飲みながら軽く食事して……

「うっ、頭が痛い。二日酔いだ」

それから円さん行きつけのバーを1・2・3件梯子してタクシーでコンビに行っておりえないような買い物をして……

今にも寝そうな円さんを起こしながら円さんのマンションに……

「円さんを部屋まで連れて行き、僕はソファアに？ それじゃここは円さんのマンション？」

そんな事を考えているとお腹が空いてきて人の家だと判っていたけどキッチンにある大型冷蔵庫を開けて、直ぐに閉めた。

見てはいけない物を見た気がする、それはビールやお酒のコマーシャルでしか見た事のない様な冷蔵庫の中身だった。

綺麗に色とりどりの缶ビールや、缶チューハイが並んでいて野菜室には日本酒のビンが立ち並んでいる。

食材といわれる物は片隅に追いやられていた。

一息ついてキッチンを見回し有り合わせの物でスープを作る。

野菜を刻んでブイヨンで煮込み、トマトの缶詰を入れて、流石に二日酔いで昨夜買ってきた塩おにぎりは食べられないのでご飯だけをスープの中にぶち込んだ。

お酒のつまみを作る為か調味料や缶詰はかなりの品揃えだった。

しばらくしてスープが出来上がった頃、寝室からゴソゴソと円さんが起きてきた。

「あん？ お前、誰だ？」

「おはようございます」

寝ぼけているのか二日酔いなのか、もちろん後者なのだろう。

額に手を当てて頭を掻きながら今にも人殺しでもしそうな怖い顔つきで僕の顔を睨みつけながら首を捻っていた。

「ああ、コオロギか。今、人を殺しそうな顔しているって思っただろっ」

「お、思っていないです。確かに寝起きの悪そうな顔していますけれど」

ずばり言い当てられて、咄嗟に嘘を付いた。

嘘でも付かないと本当に殺されそうな気になったからだ。

凄く綺麗な人の機嫌の悪い顔は恐ろしく怖い物なのだと、その時に生まれて初めて思った。

「悪いと思っただんですけど。キッチンをお借りしました」

「朝ぱらから何を作ったんだ？」

「スープですけど飲みます？」

「どうせろくな物じゃないんだろ。味見くらいしてやるから、持って来い」

円さんがソファーに腰を沈めてダルそうに首を左右に振ってコキコキと首の骨を鳴らしていた。

食器棚にあった大き目のマグカップにスープを入れてスプーンを添えて円さんの前に置いた。

「ここに置きますよ」

僕もマグカップにスープを入れてソファーに座り少しずつ飲み始めると円さんもカップに口をつけて不思議そうな顔をした。

「口に合いませんでしたか？」

「いや、ん？ ん！」

微妙な返事しか返ってこなかったしばらくすると、円さんが何も言わずに僕の目の前にマグカップを突き出した。

「片付けて良いですか？」

「お代わり」

円さんが突き出したマグカップにスープを入れて円さんに渡すと黙々と飲み始めた。

しばらくするとまた僕の目の前にマグカップが突き出てきた。

「お代わりだ」

「少ししか残ってないですよ」

「あるんだろ、入れて来い」

「判りました」

自分の飲み終わったカップと円さんのカップを持ってキッチンに向かい。

円さんのカップに残りのスープを入れて鍋と自分のカップに水を入れキッチンのシンクに置いた。

「コオロギはこれからどうするんだ？」

「今日、首になったバイト先の給料が入るので、仕方が無いですけど実家に帰ります。住んでいたアパートが全焼してしまっただけ何もかも失くしてしまいましたから」

円さんにマグカップを渡すと溜息をついて何かを考えながらマグカップのスープを飲み干した。

「シャワーを浴びてくるから綺麗に片付けておけよ」

そう僕に言っただけで円さんはバスルームにフラフラと入っていった。

まあ良いか、そう思っただけでキッチンで洗い物を開始する。

フキンで綺麗にシンクまで吹き上げて元通りに片付けた。

入っている物は別として冷蔵庫の中といい、キッチンやダイニングは綺麗に整理整頓されていた。

たぶん、円さんの性格なのだろう。

昨夜見た円さんが着ていた青いストライプのシャツも綺麗にアイロ

ンが掛けられていたのでとても几帳面な人だと思った。

これからの事を考える、考えるといっても実家に帰るか……

「おい、コオロギ。実家に帰るのは却下だ」

不意に後ろから円さんに声を掛けられて僕は振り向いて固まってしまった。

そこにはシャワーを浴びてバスタオルを一枚体に巻いただけのあれもない姿の円さんが立っていた。

「ふえ？」

あまりに突拍子も無い荒唐無稽な事をバスタオル一枚の円さんに言われて変な返事をしてしまった。

「『ふえ？』じゃない。コオロギ、実家に帰らずにここに居ろ」

「で、でも。女の人と一緒になんて駄目ですよ」

「ああん、俺の命令が聞けないのか？」

円さんがバスタオルを巻いただけの格好で僕に向って歩いてきて、思わず目を逸らしてしまった。

「コオロギ、もしかして照れているのか？」

「何か着てください。僕の方が恥ずかしいですから」

「見たくないか？ そんなに俺は魅力ないのか？」

円さんがとんでもない事を口にした。

僕だつて一応男だ、女の人の体に興味が全く無いと言えば嘘になる。でも今はそんな場合じゃない。

色々な事が駆け巡り、頭の中がパニックになった。

「み、魅力が無いなんて事は無いです、ま、円さんはとても綺麗でスタイルもいいし、見たくない訳ないじゃないですか。でも実際は見たいなんて言えない訳だし……」

俯いて目を瞑り顔の前で手を振りながら訳の判らない事を叫んでしまった。

その時、円さんが強い口調で僕を呼んだ。

「コオロギ！」

「はい？」

生まれ付いての末っ子長男気質の僕は思わず顔を上げて返事をしてしまった。

そこで僕の意識が吹き飛んだ。

悪魔の様な笑顔で、両手でバスタオルを開いた生まれたままの姿の円さんが立っていた。

生まれて初めて女の人の全裸を見てしまったのだ。

顔が真っ赤になり頭からはボルケーノの水蒸気爆発の様に湯気が立ち上った。

沸きあがる僕の頭とは対照的に体はマイナス50　で瞬間冷凍されたマグロのようにカッチンコッチンに固まっていた。

そんな事はお構いなしに円さんはバスタオルを体に巻きなおして、僕の横までキッチンの状態を確認しに来た。

「おお、完璧だな」

そこで僕の意識は完全にフェードアウトした。

「おい、コオロギ。起きろ」

「起きろってば」

円さんの声が遠くでして円さんに頬を叩かれて目を開けると初めて会った時の様に円さんの顔が目の前にあった。

「悪い、少しふざけすぎた」

しばらく虚ろな頭で円さんの顔を見上げていると何があったのか思い出して飛び起きて土下座した。

「ご、ごめんなさい」

「コオロギ、お前が悪い訳じゃないから頭を上げてシャワーでも浴びて来い、今すぐに。早くしろよ、出掛けるから」

そう言いながら円さんは優しい笑顔で僕の頭を撫でてくれた。言われた通りシャワーを浴びる。

トランクスと靴下は昨夜のコンビニで恐ろしい程の買い物をした時に買ってあった。

シャツの着替えが無かったのでバスルームから顔を出すと円さんが

シャツを僕の頭に投げた。

「とりあえず、俺のシャツを着ろ。私は男物しか着ないから、コオロギにも着られるはずだ。まあコオロギは私より小さいから大きいかもしれないがな」

少し躊躇いながら上半身裸で居るわけにもいかず綺麗にアイロン掛けされたシャツを着た。

「それじゃ、行くぞ」

「どこにですか？」

「会社だよ、今日は休日出勤なんだ」

「僕もですか？」

「俺の裸を見ておいて拒否するか？」

「わ、判りました」

末っ子長男気質は年上の女の人には逆らえない。

気質と言っよりなんだか脅迫されている気がするのだけど気のせいかな。

紺色のダッフルコートを着てマンションの外にでると、夜は気付かなかったが円さんのマンションが超高級マンションである事に気が付いた。

「置いて行くぞ」

「待ってくださいよ。円さん」

出版社

円さんの会社はマンションからタクシーで10分ほどの所にあった。そこは副都心に程近い総ガラス張りの大きなビルで抜けるような青空が写り。

太陽の光を反射してキラキラと輝いていた。

「へえ、凄いな。インフィニート出版か、ここ数年で急成長をする今や飛ぶ鳥を落とす勢いの出版社ですね。携帯小説やライトノベルを多く排出して伸びに伸びている会社じゃないですか」

「コオロギは何者なんだ？」

「えっ？ 僕だって世間一般的なことは知っていますよ。常識じゃないですか」

「いや、やけにオタクぽいと言うか。まあ良いか、大人しくしているよ」

「円さんが悪魔みたいに意地悪しなければ大人しくしています」

「ほお、コオロギがよく言った」

円さんがヘッドロックを掛けて拳をグリグリと僕の頭に押し付けた。「痛いです」

「痛くしているんだ」

「ゴメンなさい。もう余計な事言いません。意地悪……うううう」

「ああ、もう男が泣くな」

円さんは大きな歩幅で堂々としていた。

インフィニート出版の大きな建物に入ると周りからの視線を直ぐに感じた。

円さんに対する憧れや尊敬の眼差しと、円さんの後ろを歩く僕に対する興味と珍獣でも見るような微妙な視線だった。

そんな視線に耐えられず円さんのスーツ姿の背中を凝視して堪えた。

エレベーターに乗り7階に行くと正面が円さんの職場らしかった。

「おーす」

「編集長、遅いすよ……」

「おはようございます……」

「おお、アリスがやっと来たか？」

うう、視線が痛い。着いてこなければ良かった。

どうして良いのか判らない、そう思ったが礼には礼を挨拶こそがコミュニケーションの第1歩だと教えられてきた。

「お、おはようございます」

「おはようございます。えーと？ どちら様？」

丸いメガネを掛けた、髪の毛を後ろで1つに三つ編みにした僕と同じ歳ぐらいの女の子だった。

「えっと、あのう、僕は……」

「コオロギ、こっちに来い！」

僕がオタオタしていると円さんに呼びつけられて慌てて円さんの側に向った。

「ゴメンなさい」

円さんを見ると編集室の中を見渡して眉間に皺を寄せて目を細めた。

「山ノ内はまだなのか？」

「ああ、さつき連絡があつて現場に直行だと」

ボールペンを咥えながら無精髭を生やした山男みたいな感じの人が、円さんに野太い声でそう言つて僕の方を怪訝そうな顔で見っていた。思わず円さんの後ろに隠れてしまった。

「なあ、アリス。さつきから気になるのだがお前の後ろのチンチクリンはなんだ？」

ツンツンヘアーでどこかで見た事があると思つたら格闘家の角田さんに顔つきといい体格と言いそっくりな人が円さんに聞いてきた。

「ペットのコオロギだ」

「ブッフォ！ ゲフォ、ゲフォ。ああ、もう鼻にコーヒーが入った。ペットって悪い冗談は止めましょうよ。編集長、お陰で死ぬ所でしたよ」

「お前は死んでおけ」

「酷いなあ、編集長は相変わらず、この鬼！」

「なるたき鳴滝、1回死んで見るか？」

円さんに鳴滝と呼ばれている人は背高く茶髪のロングヘアで端正な顔立ちだけどプレーボーイ風に見えた。

鳴滝さんが嘔き出したコーヒーをさっきの三つ編みメガネの子が一生懸命拭いていた。

「悪いな、うたの宇多野ちゃん」

「平気です、直ぐに拭かないと染みになっちゃいますよ」

「宇多野ちゃん編集長と違って優しいなあ」

「おだてても何も出ませんよ」

そんな会話が聞こえてきた。

すると円さんが全員を見渡して僕の事を紹介し始めた。

「まあ、ペットは別としてコオロギは俺の下僕だ。今日からパシリのバイトとして雇うから心置き無くこき使ってくれ」

うう、やっぱり円さんは悪魔だった。

下僕ってペットより酷いじゃん、それにパシリって？

雇うって何も聞いてないよ。

そんな事を考えている僕に構わずに円さんは続けた。

「ほら、男なら自分で自己紹介しろ。グズグズしていると窓から放り投げるぞ」

「は、はじめして。香乃木 進・20歳です。何でもしますので宜しく願います」

半分ヤケクソ気味で自己紹介して頭を下げた。すると

「よし、良い子だ」と言って頭を優しく撫でてくれた。

ますます円さんの性格がわからなくなってきた。

「はあ〜ん？ 香乃木でコオロギか。しかし、いくら見てもヘタレ顔なガキだな。俺の仕事の邪魔をしたら吊るすからな」

鳴滝さんは少し苦手なタイプの人だった。

僕の事を睨みつけ毛嫌いしているように感じた。

しかし、それは仕方が無いのかもしれない編集長が連れて来たとはいえ、僕は部外者である事に変わりは無かった。

「あいつは色魔の鳴滝だ。女たらしだけど情報通だから仕方なくここに置いてやっている」

「宜しく願います」

「そこで黙々とパソコンに向っているのが常盤^{とぎわ}だ」

円さんが指差した人はボールペンを咥えたままの山男さんだった。

「宜しくな」

「宜しく願います」

すると格闘家の角田さんが立ち上がった。

「俺はこのデスクの嵐山^{あらいやま}だ、アリスに苛められたら俺に言ってくれ。こいつとは腐れ縁だからな」

「デスク、そのアリスはいい加減止めてくれないか？」

「バーカ、アリスはアリスだろ。お前の隠し子に秘密を全部ばらすぞ」

「隠し子？ 俺はまだ29だぞ。隠し子の訳ねえだろが。バーカ」
「なんだか腐れ縁の意味が判る気がした。」

「たぶん何でもこの2人は気兼ねなく言い合える仲なのだと思った。」

「新人の宇多野です。よろしくね、香乃木君」

「宜しく願います」

「コオロギに言っておくが宇多野は一応大卒だからな」

「えっ？ 円さんそれじゃ宇多野さんって僕より年上なんですね」

「そうだ、苛めるなよ。そして俺がここの女王陛下の円様だ！」

「たぶん円さんは冗談じゃなく、本気で女王陛下なんて言っているんだと確信した。」

「僕は円さんみたいに人を苛めたりしません」

「ほお、もう余計な事は言わないんじゃないかなかったか？ コ・オ・ロ・ギ」

円さんが何かを驚掴みするようにしながら手を僕の方に突き出し。あの悪魔の様な笑顔で僕に向ってきて掴みかかろうとした。

僕が身構えると編集室の電話が鳴り鳴滝さんが電話に出た。

「編集長、山ノ内が出先でトラぶって鹿王院ろくおういんの原稿取りに行けない
って言っていますがどうします」

「仕方が無い、他の奴を行かすと伝える。本当に山ノ内は使えない
奴だな」

「なあ、アリス他の奴って言っても、手の空いている奴なんていな
いぞ、お前まさか……」

「ああん、デスク何を言っているかな、ここに1人居るだろ」

「ば、馬鹿おまえ、鹿王院に気に入られている山ノ内でさえ梃子摺
るんだぞ」

「大丈夫だよ、コオロギもガキじゃないんだから」

「俺は知らねえからな」

デスクの嵐山さんが円さんともめて呆れていた。

すると円さんが僕の事と呼んだ。

「コオロギ、小学生にでも判る地図を書いてやるから原稿をもらっ
て来い、いいな」

「判りました。出版社の名前を伝えれば判るのですよね」

「そうだ、これが地図だ。今が昼前だから3時には戻って来い、い
いかこれは命令だ」

「はい、それじゃ行ってきます」

僕は円さんから地図と交通費、それにドキュメントケースを受け取
って出版社を後にした。

「おいおい、アリス。勝手にあんなガキ雇って平気なのか？」

「バイト1人ぐらい、いくらでもねじ込んでやるよ。それにあいつ
は行く所が無いんだよ。バイトを突然首になってアパートも焼け出
されて、街中で途方に暮れていたんだ。誰かにそっくりだろ」

「まあ、お前の好きなようにしろ。でもな、鹿王院の所に行かせて
『3時に戻って来い』は無茶だ」

「よし、野郎ども賭けだ。俺はコオロギが戻ってくる方に1万だ」

「うひょー、編集長良いんですか？ あんなヘタレの為にそんなに大きく出て？」

「良いんだよ、鳴滝。俺はコオロギを信じているからな」

「アリスが人を信じるなんて言うのを初めて聞いたが俺は帰らないほうに1万だ」

デスクの嵐山が呆れて首を振りながら言った。

「よし、俺もデスクに1万。常盤さんはどうする」

「もち、デスクだ」

「宇多野ちゃんはどうする？」

「な、鳴滝さん。わたしは、その、デスクにだって鹿王院さんの所ですよ」

「これで決まりだ。編集長の1人勝ちか1人負け。よし今夜は飲めるぞ」

「そろそろ、仕事しろ。飲めなくなるぞ」

円さんの一声で皆それぞれ仕事を開始した。

編集部の方がそんな賭けをしている頃、僕は地下鉄に揺られていた。地下鉄を降りて駅からしばらく歩いた。

鹿王院先生の自宅兼書斎は編集社から1時間程の所にある閑静な昔ながらの大きな屋敷が立ち並ぶ住宅街にあった。

「たしか、円さんの地図だとこの辺なだけだな。あつ、あつた。凄い門構えのお宅だな」

それは昔の武家屋敷みたいなお屋敷だった。

立派な門の表札に鹿王院と達筆で書かれていた。

大きな門をくぐり玄関に向い、着ていたダッフルコートを脱いだ。

「ゴメンください。インフィニート出版の物ですが。原稿を頂に上がりました」

僕がそう言うとしばらくして玄関の引き戸が開き。

落ち着いた感じの和服姿で割烹着をつけた上品な小柄な奥さんらしき人が出てきた。

「あらあら、可愛らしい坊やだこと。上がって待っていてくださいね。さあ、どうぞこちらへ」

奥さんに案内されて座敷に通され背筋を伸ばして正座をする。脇にダッフルコートをたたんで置くと奥さんがお茶を持って来てくれた。

「寒かったでしょ。お茶でも飲んで温まって待ってくださいね。主人に伝えて参りますので」

「いただきます」

頭を少し下げてお茶を頂く。

奥さんが少し不思議そうに僕の事を見て部屋を出て行った。

「どこかであんな可愛らしい坊やとお会いしたかしら？ あなた、インフィニート出版の方がお見えですよ」

「山ノ内なら待たせておけ」

「それが今日は初めていらっしやった方でとても礼儀正しい可愛らしい坊やでしたよ」

「なんだ、山ノ内じゃないのか？ けしからん担当を勝手に変えよって」

「あらあら、あなたは山之内さんがお気に入りですもんね」

「あいつは息子みたいなモノだからな、それで名前はなんと言っただ」

「聞くのを忘れてしまいましたわ。聞いて参りましょうか？ でもどこかでお見受けした事があるような気がするのですが」

「ああ、もういい。わしが直接追いついてやる」

そう言つて白髪交じりで深い緑色の着物に枯色の羽織を着た鹿王院が書斎から立ち上がった。

僕が二口目のお茶を飲んでいると奥の方から初老の着物姿の男性が歩いてくるのが見えた。

たぶんあれが鹿王院先生なのだろうと思ひ。

茶碗を置き少し、深呼吸をした。

すると鹿王院先生が座敷に入るなり僕に話しかけてきた。

「待たせて済まないな。君は始めて見る顔だね。名前は何と言うのかな？」

「香乃木と申します。初めてお目に掛かります。ご挨拶が遅れ大変申し訳御座いませんでした。本日は山ノ内の代理で参りました。これを気にお見知り置きをいただけたら幸いです」

鹿王院先生の方に体を向けて頭を下げて挨拶をした。

「香乃木君？ はて？ どこかで……！ か、母さんや。直ぐに原稿を持ってこないか何をグズグズしている。ああ、もう良いわしが取りに行く」

そう言つて鹿王院先生が慌てて座敷から出て行つてしまった。

僕が少し驚いていると直ぐに鹿王院先生が原稿を持ってきてくれた。丁重に頭を下げて原稿を受け取り、鹿王院家を後にした。

「もう、あなたは嫌ですよ。いきなりなんなんですか？」

「何であんな方が原稿取りなどしているんだ？」

「あの坊やをご存知なんですか？」

鹿王院が奥さんに耳打ちすると奥さんが目をまん丸にして驚いていた。

僕はかなり早く原稿を受け取る事が出来たので立派な門前で一礼して。

なるべく早く帰ろうと駅に向かい駆け出した。

「ただいま戻りました」

そう言つて僕が編集室に戻つたのは2時半を少し回つた時だった。編集室に僕が入るとなんだか朝の時と違い空気が一変したのに気が付いた。

「鹿王院先生から原稿を頂いてきました」

僕が編集長の円さんに原稿の入ったドキュメントケースを渡すと僕が渡したドキュメントケースを自分のデスクの上に放り投げて僕に抱きついてきた。

うわあ、や、柔らかい物が、か、顔に当たる。

うう、でもなんだかいじいとする。

顔が赤くなるのが自分で判った。

「円さん止めてください」

「コオロギ、お前は凄いのよ。俺の思ったとおりの奴だよ。よし、ご褒美だ」

僕が恥ずかしがって離れようとしているのにいきなり僕の頬を両手でおさえて僕の唇にキスをした。

顔が真っ赤になり、僕が円さんの裸を見てしまった時と同じ様に全身から力が抜けて床に崩れ落ちた。

「あ、やべえ。また、やっちゃった」

「おいおい、アリス。いたいけな少年を弄ぶなよ。コオロギは天然記念物並みだな。キスされただけで気を失うなんて。しかし、どんな魔法を使うと鹿王院からこんなに早く原稿を取れるんだ？ 往復に2時間としたら実質、鹿王院の屋敷に居たのは30分くらいだぞ」

「さあな、俺には判らない。しかしコオロギの奴どうするかな。常盤、悪いがコオロギをソファーまで運んで寝かせてくれ。壊れ物扱いだぞ、俺の下僕なんだから」

「うーす」

山男の常盤が香乃木の体を羽毛の枕を掴むように軽々と持ち上げてソファーまで運んで寝かせる。

すると三つ編みメガネの宇多野が円に問いかけた。

「編集長、またって。香乃木君に何をしたんですか？」

「ああん？ シャワー浴びた後に体に巻いていたバスタオル取って全裸をコオロギの目の前で晒した」

「ブフォ！ ゲフォ、ゲフォ、ゲフォ！ うげえゝ死ぬう。編集長の全裸なんて俺でさえ見た事無いのに」

今日2杯目のコーヒを色魔の鳴滝が盛大に嘔き出した。

「バーカ、鳴滝になんか死んでも見せるか。そのまま死んでおけ」

「あゝあ、鳴滝さんはコーヒ塗れでアフターは今日無理ですね」

「優しい、優しい宇多野ちゃん。お願いだからデートしない？」

「私、鳴滝さんに全く興味ないですから、お断りです」

「うう、宇多野ちゃんにまで嫌われちゃった。鳴滝生きていけない」
鳴海が立ち上がり自分の肩を抱きしめて体をくねらせると編集部の全員がサムズダウンしてブーイングを上げる。

編集長の円が缶ジュースを買ってきて香乃木の枕元に座り。

香乃木の額に缶ジュースを当てて顔を覗き込んだ。

「アリスはコオロギにゾッコンか？」

「バーカ、そんな訳ねえだろ。くそ親父狩るぞ。でも、こいつと一緒に居るとなんだか凄く落ち着くんだよ」

「編集長、そう言うのを恋って言うんですよ」

「ああ、うぜえ。俺はもう恋愛なんてしねえよ、理由は全員知っているだろうが」

「ニブチンなんだか、頑固なんだか」

「鳴滝、本当に殺すぞ。てめえ」

「ああ、怖い。怖いから出先から直帰しまーす」

「鳴滝、俺のデスクに1万きっちり置いてから行けよ」

「ちっ、覚えていたか。了解です。それじゃお先デース」

そう言いながら鳴滝が1万を机の上に置いて編集部を飛び出していった。

円が溜息をつきながら香乃木の額を缶ジュースで軽く？ 叩くとゴーンと鈍い音が編集室に響いた。

「コオロギ、いい加減起きろ」

僕はおでこに強い衝撃を受けて目を覚ました。

起き上がりおでこを触ると大きなたんこぶが出来ていて鈍い痛みを感じると目から涙が溢れてきた。

「う、うう、痛いよ……」

「おい、アリス。今のはかなり痛いと思うが？」

「悪かったよ、謝れば良いんだろうが。コオロギ、ゴメンな悪気は

無かったんだ。ちょっと力の加減を間違えたんだ」

「力の加減を間違えても叩いたんでしょ」

「ああ、もう。それじゃ俺の頭も殴れ」

円さんが綺麗な髪の毛を掻きむしりながら、僕の目の前に頭を突き出してきた。

女の人を殴る訳にもいかず。

円さんの頭を撫でてみると髪の毛が絹の様にサラサラだった。

「女の人に、手を上げられる訳無いじゃないですか。僕は男ですよ」

「ああ、コオロギは痺れる事言うね。しかし、コオロギもアリスと同じくらい訳判んない男だな。うぶなのか、泣き虫なのか、それでいて紳士みたいな事言いやがるし。平気で信じられねえ事をこなしやがる。明日からが楽しみだよ」

デスクが僕の顔を見て不思議な事を言っていた。

僕は少しだけ泣き虫だけど普通だと思っているのに。

「帰るぞ、コオロギ」

「はい」

僕が立ちあがると円さんがまた頭を撫でてくれた。

円さんに頭を撫でられるとなんだか判らないけれども心が温かくなるような気がした。

円さんはそんな優しい人です。

「帰るから、全員出すもん出しゃがれ」

円さんがデスクや常盤さん、それに宇多野さんから1万円を受け取っている。

「よし、今日は俺の1人勝ちだな。4万ゲットだ」

「円さん、何のお金ですか？ それ」

「アリスと賭けをしたんだよ。コオロギが鹿王院の屋敷に行って3時までにかえってこられるか。それで俺たちはあり得ない事に負けたんだ」

デスクが僕に教えてくれた。

先ほど思ったことを訂正します。

やっぱり円さんは悪魔の様な人でした。

「コオロギ、くだらない事を考えてつたら殴るぞ。帰るんだ。4万渡すから俺のために美味しい飯を作れ。いいなこれは命令だ」
再訂正します、悪魔の様な鬼でした。

うわぁ、また殴られた。

「痛いよ、円さん」

「くだらない事考えてないで早く来い」

円さんが僕の首根っこを強引に掴んで引きずる様に編集室を後にする。

僕は残っているデスク達に「お先に失礼します」と言うのが精一杯だった。

そしてなし崩し的に円さんに振り回されるままに円さんのマンションに転がり込む事になったしまったのだ。

「デコボコ漫才コンビが帰ったから俺達も撤収するぞ」

「うーす」

「はーい」

百貨店

翌日の日曜日。

僕は円さんに連れられて大きな百貨店に来ていた。

何でも僕の身の回りの物を買う為だっけって言うていたけれど。

とても嫌な予感がして丁重にお断りしたら烈火の如く凄く怖い顔をされて却下された。

当の本人は僕の気持ちを知ってか知らないでか僕の横でエスカレーターに乗りながら楽しそうにしている。

円さんのハミングが流れてきた。

「シューベルトの野ばらですか？ 楽しそうですね」

「あれ？ コオロギは楽しくないのか？」

「楽しくはないですよ」

「微妙に、嫌な言い方するんだな。俺と一緒に嫌なの？」

「無理矢理が嫌なんです」

「あつ、そう」

円さんがそっぽを向いた。

誰が見ても拗ねているのが判る。

ん？ 判らないかも。

円さんの性格がいまいち良く理解できない。

まあ、出会ってからまだ3日目だから判る方が不思議なのかもしれない。

僕はありのままで向き合うしか出来ないんだと思った。

「円さん、行きますよ。そっぽ向いていたら危ないですよ」

「ああ、うるさい。コオロギに言われなくても判っている」

男物のフロアーに着くと円さんの目が爛々と輝き出した。

キョロキョロしながら何かを見つけて突撃していった。

「おい、コオロギ。これ着てみる」

円さんが手に持っていたのは紳士物のスーツだった。

「嫌です。七五三みたいになるから」

「俺が着ると言っているんだ。着ろ、判ったな」

はあ、円さんに逆らえる訳が無く試着室でズボンを穿きスーツに袖を通して試着室のカーテンから顔を出した。

「着替え終わったか？ どれ見せてみる」

僕がカーテンを開けた瞬間、円さんのこめかみがひくひくと痙攣して笑いを堪えているのがわかった。

「笑って言いですよ。慣れていきますから」

すると円さんが堪らずお腹を抱えて大笑いし始めた。

やっぱり笑われた。

僕は直ぐにカーテンを閉めて着替えた。

「本当にコオロギはスーツ似合わないな」

「仕方が無いじゃないですか。僕は円さんみたいに背も高くないし童顔ですから」

買い物しながら色々な服を着せられて買い物をしていく、一通り買い物をして円さん和其他のフロアーも見回す。

婦人服のフロアーを歩いていると円さんが何かを閃いた様に僕の顔を覗き込んだ。

それは悪魔の笑顔だった。

冷や汗が一筋流れて背筋がぞつとする。

その場に居るのが嫌で歩き出すと円さんに腕を掴まれた。

「コ・オ・ロ・ギ、逃げるなよ」

僕の予感が的中した。

フロアーを僕の手を掴んで引きずり回って、やっと止まったと思ったらフリフリのフリルやレースが沢山ついているワンピースを僕の前に円さんが突き出した。

「俺が言いたい事判るよな」

「苛めだ……」

「苛めているんだ」

僕はある意味、円さんに拾われて円さんの家に置いてもらっている。実家に帰ればいい事なのだが今だけはどうしても帰りたくなかった。自分の気持ちを押し殺してワンピースを受け取りフィッティングルームに入り着替えをする。

幼い頃の事が頭に浮かんできた。

僕には3人の姉がいる、少し歳が離れている事もある僕にはまるで動くオモチャのように遊ばれていた。

それはけっして僕の事が嫌いじゃないのは判るのだが、子どもの頃から体が小さかった僕は着せ替え人形のように姉達に扱われていたのだ。

着替えを済ませてカーテンを開けると円さんが楽しそうに僕の事を見ていた。

「コオロギ似会ってるぞ、メチャ可愛いぞ」

「……もう良いですか」

カーテンを閉めて自分の服に着替える。

段々自分が情けなくなってきた20歳にもなって子どもの頃となんら変わらない事をしている。

今も昔も姉達からは「だから進ちゃんは駄目なんだ」と言われ続けた。

奥歯をグツと噛み締めて堪えていたがカーテンを開けると円さんが別のワンピースを持って笑っている、姉達が蔑んで僕を見る笑顔とダブってダムが決壊したように我慢していた物が一気にあふれ出した。

悔しくて止め処もなく涙が溢れてくる、僕はクシャクシャの顔になりながらフィッティングルームを飛び出した。

泣いている僕の顔を見て慌てて止めようとした円さん手を振り解いて走り出していた。

どこをどう走ったのか判らないが僕は気付くとフロアーの奥にあるトイレで声を上げて泣いていた。

「う、くううう ひつく ひつく ううううう……」

トイレの中に自分の鳴き声と鳴咽がこだまする。

泣いている自分に、我慢できなかった自分に腹が立ち拳をトイレの壁に打ちつけた。

ゴンと鈍い音が響いて拳の皮膚が裂けて血が滲んだ。

その瞬間、トイレのドアが勢い良く開いて円さんがトイレに飛び込んできて僕の体を後ろから抱きしめた。

「止める！ 俺が悪かった。だから自分を傷つけるのは止めてくれ。お願いだから」

ポタポタと温かい物が僕の頭に落ちる、円さんが泣いている。

そう感じた瞬間体から力が抜けて僕はトイレの床にしゃがみ込んでしまった。

そして体からすーと何かが抜け落ち、ザワザワと波立っていたものが風の無い湖面の様に静まり返った。

しばらくトイレの床に2人でヘタレ込んでいた。

僕の体を抱きしめている円さんの手を触ると少し驚いたのかビクンとしたが構わずに優しく握り締めた。

「円さん、取り乱してすいませんでした。子どもの頃に姉達に着せ替え人形にされたのがフラッシュバックしてパニックになちゃいました」

「そっか」

円さんの手を解き振り返って円さんの顔を見ると涙がまだ少し流れていた。

僕はそれを指で拭った。

「円さんに涙は似合わないです」

すると円さんが僕の側頭部を両手で押えてヘッドバットをしてきた。

「俺の下僕が偉そうな事言うな。置いていくぞ」

そう言いながら円さんが笑顔に戻り立ち上がった。

おでこは痛かったけれど円さんが笑顔でいるのならそれでいい気がして僕は円さんの後についてトイレを出た。

トイレを出ると円さんが僕の右手首を掴んで上着のポケットからハンカチを出して、血が滲んでいる僕の手に優しく巻いて縛ってくれた。

「ありがとうございます」

「今度、また自分を傷つけてみる。俺が殴り飛ばすからな」

「判りました。円さんの命令なら従います」

「あの、な……」

円さんが初めて自分から言いかけて止めたので不思議に思っただけで円さんの顔を見ると少し困った様な顔をしてごによごによと何かを言っているように見えた。

「円さん、どうしたんですか？」

「仕方が無い。コオロギの願いを1つだけ聞いてやる。その、泣かせてしまったお詫びにだ。1つだけだからな」

「何でもですか？」

「何でもだ。ノーとは絶対に言わない」

なんだか初めて円さんが照れているのを見た気がして、円さんには悪いけど嬉しかった。

円さんの手を取って歩き出すと円さんの顔が赤くなっていた。

「それじゃ、行きましょう。ほら、そんな赤くなってるんで行きますよ」

「お、俺は赤くなんかなくていいコオロギの目がおかしいのだ」

「そう言うことにしておきましょう」

円さんの手を握りながら、何をしてももらおうかと考えながらフロアーを歩いているとマネキンが着ているワンピースに目が留まった。そのワンピースは黒の落ち着いた感じのペイズリー柄の長袖で胸元が少し大きめに開いた膝丈のとてもシンプルなワンピースだった。

僕は円さんのスカート姿を見た事が無かった。

職場ではスーツにパンツだし今日もジーンズにパンプスを履いてパリッと糊の効いたピンストライプのシャツに茶系のジャケットを着

て軽そうな黒いハーフコートを羽織っていた。

それはそれでスタイルが良くて背の高い円さんの事だから誰が見ても振り返るくらい綺麗で素敵なのだが。

「あれを試着してください」

「えっ？ コオロギあれはワンピースじゃないのか？」

「ワンピース以外に何に見えるんですか？ 円さんなら似合うと思いますよ」

その時、僕には理由は判らなかったが円さんがとても躊躇っているように見えた。

「コオロギあれはちよつと」

「ええ、円さんが僕に嘘ついた。ノーて言わないって言ったのに」
少し僕が悪戯顔で言うと言ったのか円さんが店員を呼んでワンピースを試着したい事を告げフィッティングルームに入っていた。しばらくするとカーテンがあいてワンピース姿の円さんが現れた。どう言っても良いのだろう、生まれて初めて人間は本当に驚いた時には声が出ないものなんだと感じた。
見蕩れてしまった。

ワンピース姿の円さんは綺麗過ぎて、神々しさを感じると言えはいのだろうか。

すらっと伸びた手足とスタイルの良い体にワンピースがとてもマッチしてギリシャかどこかの女神像でも見ているかの様に魅せられてしまった。

「こ、コオロギ。も、もう良いか？ 恥ずかしいのだが」

「あつ、すいません。あんまりに似合い過ぎて、円さんがとても綺麗なので見蕩れてしまいました」

円さんが不思議な事を言ってきたに我に返り、思ったとおりの事を言ったら円さんがいきなりカーテンを閉めて着替え始めてしまった。

「ゴメンなさい。僕がなにか怒らせるような事言ってしまいましたか？」

「な、何でもない。着替えるから待ってろ」

女の人がワンピースを着て恥ずかしいなんて円さんも可愛らしいなんて、大人の女性に失礼なことを考えていると円さんが着替えを済ませてワンピースを腕に掛けて出てきた。

どこと無く顔が赤い気がしたが突っ込みを入れると数倍になって返って来るのを身に染みていたので突っ込まずに手を差し出した。

「な、なんだいきなり手なんか出して」

「ワンピースを貸してください」

「コオロギが着るのか？」

「僕が着る訳ないじゃないですか！」

思わず声を荒げてしまった。僕にはそんな趣味はないし、ましてや脱いだばかりの円さんの温もりが残るワンピースを着るなんて考えただけで顔が真っ赤になってしまった。

「円さんにプレゼントするんです」

「俺はワンプンなんて着ないぞ」

「良いですよ、別に。これは僕の気持ちです。円さんが僕のお願いを聞いてくれたし、素敵なワンプン姿も見せてくれたのでその記念です」

僕がレジに向って歩き出すと円さんが少し慌てたように追いかけてきた。

「コオロギはお金なんて持ってないだろ」

「僕だって子どもじゃないのですからカードぐらい持っていますよ。ほら」

カードを財布から出して円さんに見せた。

そのカードは僕が未成年の頃から持っていたものなのだが。

「コオロギ、本当に買うのか？俺は着ないぞ。勿体無いだろ」

「僕の気持ちですよ」

「カードがあれば路頭に迷わなくても良かったんじゃないのか？」

「これは実家の親に持たされたんです。あの時も今もですけど実家にだけは絶対に頼りたくないんです。それに路頭に迷ったからこそ、こうして円さんに出会えたんじゃないですか。だから少しでもお礼

させてください。今日はそう言う意味で特別なんです」

「まあ、コオログが買うつというのなら勝手にしろ。俺は絶対にワンピースなど着ないからな」

レジに着き、ワンピースと黒いカードをだすと店員の女の人が少し驚いて戸惑いながら清算をしていた。

すると店員のぎこちない態度に気付いて円さんが後ろから声を掛けてきた。

「おい、コオログ」

「まだ、なにか言い足りないですか？」

「その、黒いカードは何だ？ 店員さんの態度も微妙に余所余所しいと言うか」

「このカードならこの百貨店だって買えますよ」

「はあ？」

「もう、冗談ですよ。僕がそんなカード持っているように見えますか？ お腹が空いたからどこかで食事をしましょう。もちろん円さん持ちで、僕はそんなお金持ってないですから」

「まあ、それは構わないぞ。昨日の賭けの4万もまだあるしな、でも……」

「ほら行きますよ」

僕はワンピースの入った紙袋を受け取ると今日買った自分の身の回りの物が入った紙袋を持って円さんの背中を押して歩き出した。

この買い物が後になり編集部の皆を大変な事に巻き込んでしまうなんてその時は思いもよらなかった。

デパートを後にして円さんの案内でケヤキ並木のある大通り沿いの、外国の建築を模したようなアーチのある建物のオープンカフェに来ていた。

ケヤキ並木が紅葉してだいぶ葉は落ちていたが日が射していて風も無く暖かった。

軽く食事を済ませて食後に僕はフルーツがたっぷり入ったロールケ

ーキとアイスモカチーノを。

円さんはカプチーノを飲んでいた。

「僕、こんなオシャレなお店に始めてきました」

「コオロギは今まで何をしていたんだ？」

「バイトを色々です。生活するだけで精一杯でしたから」

「実家に頼らずか？」

「ええ、格式ばった家が嫌で、それに姉達には長男なのだからとうるさく言われて。それが嫌で高校を卒業すると直ぐに家を飛び出して逃げ回っていました」

「逃げ回っていた？」

「はい、実家の親に見付かったら連れ戻されちゃうんで」

「そうなのか、大変なんだな」

円さんはカプチーノが入ったカップを持ったまま僕がケーキを食べているのを見ていた。

「コオロギ、頬にクリームが付いてるぞ」

「ええ？ どこですか？」

僕が慌てて手で取ろうとしたら手を掴まれた。

「動くなよ」

円さんはそう言っ僕に顔を近づけてきた。

「へえ？」と思った瞬間。

円さんが僕の頬についているクリームをペロツと舐めた。

もの凄く温かくって柔らかい物を頬に感じて僕は真っ赤になって俯いてしまった。

「もう、円さんは何でいつもそんな恥ずかしい事出来るんですか？」

「バーカ、コオロギは弟みたいなものだからな」

円さんに言われてなんだか心がチクリと痛んだ。

でも円さんから見れば僕は弟にしか見えないのだろう、歳も離れてるし円さんより背が低くって僕の顔はどう見ても未成年にしか見えない童顔なのだから。

姉弟と思えば一緒に暮らしていてもおかしくないんだなと思った。

「そうですよね。あはは……」

「変な奴だな。そろそろ帰るぞ」

円さんが徐に立ち上がって店の出口に向いた時、円さんがテーブルに躓いた。

テーブルが揺れる。

アイスモカチーノが入っていた背の高い円筒形のグラスが傾き。

テーブルから落ちそうになる。グラスを左手で掴み取り。

倒れそうになる円さんを後ろから腰の辺りに手を回して右手1本で支えた。

寸での所で円さんが倒れないで済んだが僕の右手には円さんの殆どの体重が掛かっていた。

「大丈夫ですか？ 円さん」

「ああ」

「もう、気をつけて下さいよ。怪我でもしたらどうするんですか」

「コオロギ、お前のちっこい体のどこにそんな力があるんだ？」

「酷いな、僕はこれでも一応男ですよ」

円さんが立ち上がり、僕の方をまじまじと見ていた。

編集室

僕が円さんに助けられて住む所も仕事も与えてもらい。

そんな生活に慣れてきた頃には、もうクリスマスが直ぐそこまでやって来ていた。

そして色々な事が動き出してしまっ、良い事も悪い予感も。

小さな歯車が少しずつ大きな歯車を動かすように。

良い事って言うのは僕が出版社の円さんの編集部以外の人達に認知されて来たって言う事なんだけど。

それはそれでなんだか微妙な感じだった。

「コオロギ君、おはよー」

「おはようございます」

「きゃー可愛い！ ふにゅふにゅ、ほっぺ触らせて。いやん、柔らかい」

そんな事を言ながら僕の頬を摘んで来る他の部署の女性社員や中には……

「あっ居た。コオロギ君おはよー、ほらほらお姉さんが柔らかい胸でハグしてあげる」

「おはようございます。言ってから抱きついて着てくださいね」

「もう、クールなんだから」

なんだか顔を覚えられるのは嬉しいのだけど、どこかのマスコットキャラみたいな扱いなのだ。

お陰様で最近じゃ女の人に対する免疫が出来てきて、円さんに抱きつかれようが胸を押し当てられようが顔が赤くなる事はなくなってきたからそれはそれでいいのかもしれない。

「おっ、コオロギ君。頑張っているか。円の事、宜しくな」

僕の頭をなでながら渋い声で言ってくる、この人は何でもこの会社の常務さんらしい。

背が高くがっしりとした体格で、ロマンスグレーの髪の毛をいつも綺麗にセットしてキリッとした目鼻立ちの格好良いおじさんである。女子社員の間ではナンバーワンの人気で愛妻家だと聞いたことがあった。

「おはようございます。遅刻しそうなのでこれで失礼します」
一礼をして編集室に向う。

編集室に入ると直ぐにデスクが声を掛けてきた。

「おい、コオロギ。お茶を入れてくれ」

「はい、判りました」

編集室の隅にある小さなキッチンでお茶を入れる。

人数分のお茶葉を急須に入れ少し冷ましたお湯で1分ほど蒸らしてから湯飲みに入れてスタッフ全員に配る。

「デスク、ここに置きますよ」

「おお、悪いなお茶汲みなんかさせて」

「そんな事無いですよ、僕には雑用以外に出来る事ないですから」

「しかし、コオロギが入れたお茶は美味いよな。何が違うんだ？」

「僕に言われても判らないですよ。普通に入れていただけですからそんな事をお喋りしながらお茶を配って歩く。」

「なあ、デスク。最近うちの会社の株を買い占めている輩が居るらしいじゃん。大丈夫なのか」

「鳴滝が気にしてもしようがねえだろう。仕事しろ、仕事」

「へえい」

これが最近良く聞く悪い噂と言うか悪い予感なんだ。

そこに出ていた円さんが帰ってきた。

「お疲れ様です、円さん。今、お茶入れたんで」

「おお、悪いなコオロギ。しかしまいった。また取材拒否だよ、このままじゃ^{ブシユケ}Psycheに穴開くぞ。午後からまた出てくるからな。デスク、山ノ内は？」

「鉄砲玉」

「常盤は？」

「写真撮り」

「はあ、年末はたださえバタバタなのにこの騒ぎどうにかならないか？ 鳴滝、例の小説はどうなっている？」

「今、宇多野ちゃんが調整中です」

Psycheフシユケと言うのはこの編集部が出している、今人気の女性誌の名前で。

名前のPsycheフシユケの由来は、ギリシャ神話に出てくる人から神になった女の人の名前らしい。

神となったフシユケは「愛」を支えるのは見ることも確かめることでもなく、相手を信じる「心」であると恋人たちにささやく役目を担うと言われてて。

試練の過程で人間として初めて生きながらに冥界の川を渡ったことから、その名は「魂」を指すことともなってる。

そして魂の象徴は蝶なんだって。

だから愛の伝道師や魂、そして魂の象徴の蝶を表しているんだって全部、円さんの受け売りなんだけれど。

そして何よりこの雑誌は円さんが全身全霊を賭けている雑誌なんだ。

「イヤー！！ どうしよう。やっちゃた」

宇多野さんが頭を抱えながら叫んで皆の視線が宇多野さんに集まった。

「どうした宇多野ちゃん？」

「鳴滝さん、やっちゃいました」

「はあ？ まさかまたか？」

「はい」

宇多野さんの話では何か大切なデータを消去してしまったらしい。

「おい、宇多野。俺が戻るまでに完全修復させておけよ。いいな」

「はい、編集長。判りました」

円さんは取材の交渉のために急ぎ足で編集室をでて行った。

「なあ、宇多野ちゃん。PCオタクの常盤さんが居ないんじゃないやお手上げたぞ」

「どうしましょう、鳴滝さん」

「そんな目で、俺を見られてもな。俺は女専門だから、復帰できなかったら大騒ぎだぞ、編集長はただでさえカリカリしているのに。誰かの首が飛ぶぞ」

宇多野さんは今にも泣き出しそうな顔をしていた。

この間までは僕はPCを持っていて使いこなしていた、火事で炭と灰になっちゃったんだけど。

だから多少のトラブルなら解決できると思い宇多野さんに声を掛けた。

「宇多野さん、ゴミ箱も全部空なの？」

「はい、この上のホルダーに保存したつもりなんですけどゴミ箱に入れちゃったみたいで、気付かずに空にしちゃったんです」

「ちよつといいかな。僕が復帰させてみて良いかな？」

そう言つて宇多野さんPCの前に座りPCを確認してこれならいけると思つた。

その時、鳴滝さんに肩を掴まれた。

「おい、ガキが。勝手な事するんじゃないやねえよ。仕事の邪魔をするなと最初に言つたはずだぞ」

「鳴滝さん、何もそんな言い方をしなくてもいいじゃないですか」

「宇多野ちゃん、このガキは部外者だ。俺はガキが大嫌いなだけだ」

「鳴滝さん。僕にも多少PCの知識はありますから。もし駄目なら僕が駄目にしたつて円さんに報告して構いません。何もしないで手を拱いているよりは良いでしょ」

僕が、鳴滝さんの顔を見ながらそう言つと、鼻で笑われた。

「勝手にしろ、どの道編集長には怒鳴られるんだ。他のデータまで駄目にしたらここから追い出すからな」

「判りました。宇多野さん空のROMありますか？」

「はい、これ」

宇多野さんからROMを受け取りPCを借りて作業を始める。

カタカタとキーボードを叩く音と力チ力チとマウスをクリックする音が編集室にこだまする。

バックアップしてから検索作業をする。

宇多野さんにファイル名と更新日を聞きながら作業をすすめた。

「これかな、Enterと」

「うわあ、凄い。助かりました。香乃木君ありがとう」

引つ張り出したデータを見て僕は驚いた。

それはこれから書籍やアニメ化・映画化される予定の携帯小説のデータだったのだ。

「あれ？ これって携帯小説の」

「香乃木君、知っているの？」

「宇多野さん、実は僕、携帯小説フリークですから」

「へえそうなんだ。あのね、編集長には言わない方がいいよ」

「円さん、駄目なんだ」

「駄目じゃなくて大嫌いなかな、今でこそPsycheがあるからいいけれど。配属当時はこんなオタク編集部なんて辞めてやるって一悶着あつたってデスクから聞いた事があるの」

「香乃木君。これが、今一番人気の『初恋・幽霊の時』だよ。もう直ぐでラストのだけれど中々アップされなくて」

「こ、これって」

「香乃木君、何か知っているのか？」

「あはは……わ、忘れてた……へえ？ そ、そうなんだ」

僕はバイトを首になってからのバタバタで忘れていた事を思い出した。

「変な香乃木君。この他数点の作品の中から選考して、直ぐに映画化しようとプロジェクトが進んでいるんだけど一番人気のこの作品がなぜかラストがアップされていなくて作者ともメール出来なくて困っているんだよ」

「そ、そうだったんだ。それじゃ僕は自分の作業に戻るね。鳴滝さ

ん、データ復帰しました」

「ほお、このガキがね、意外と使えるじゃねえかガキのくせに」

僕は円さんに言われた書類の整理を再開するために作業に戻ろうとすると鳴滝さんが腕を組みながら目を細めて僕を見ていた。

公園

夕方になり円さんが疲れ切った顔で戻ってきて椅子に倒れこんだ。そこにあのダンディな常務さんが血相を変えて駆け込んできた。

「おい、円君。どうなっているんだ？ 取材の方は」

「今、全力で調整中です」

「時間が無いんだぞ」

「判っていますよ。常務に言われなくても、皆、必死にやっているんです」

「全く、どうなっているのだ。この会社は、どこの財閥が判らんが理由も無く株が買い上げられて」

常務と円さんが言い合いを始めてしまった。

そして僕の頭の中には1つの嫌な予感がしていた、常務の話を聞いていると僕がカードを使った翌日くらいからおかしな株の買取が始まったのだ。

財閥そして取材拒否、明らかに大きな力が動いていた。

「宇多野さん、申し訳ないのだけど携帯を借りられないかな。電話をしたいんだけどここじゃあれだから」

「ええ、良いよ。気にしないで使って、データを復帰させてもらったんだもん。ドンドン使っつていいから」

「ありがとう、それじゃ借りるね」

宇多野さんから携帯を借りて編集室をでて少し先の廊下で電話していた。

「おい、宇多野。コオロギは？」

「あ、今電話中です」

「良いから呼んで来い。あの馬鹿が仕事を中途半端で終わらせやがって」

僕は宇多野さんが呼びに来たのに気付かずに電話をしていた。

「……もう止めて！ これ以上は編集部の皆に迷惑が掛かるから。……約束？ 忘れてないよ。でもこれ以上何かするのなら僕にも覚悟があるからね。……結納の準備？ すれば良さ。これ以上手出しするのなら僕は死ぬのさえ厭わないからね。円さんに助けてもらわなければ僕は死んで居たんだ。死ぬのなんか怖くない……判ったから直ぐに手を引いてクリスマスには帰るから」

「こ、香乃木君？ 結納って？」

僕が振り返ると宇多野さんが真つ青な顔をして立っていた。

たぶん興奮して大きな声になっていたから結納や死ぬの云々を聞かれてしまったのだろう。

「あはは、宇多野さんそこに居たんだ、聞かれちゃったかな？」

「ご、ゴメン。聞く気は無かったんだけど編集長が呼んで来いって」
「皆には黙っていてくれるかな。実は僕には家同士で決めた会った事も無い許婚がいるんだ。それで20歳になった年の正月に結婚しなきゃならないんだ。でもそれが嫌で逃げ回っていた、その事で皆に迷惑かけちゃった。円さんには心配かけたくないから何も言わないで」

「うん、良く私には判らないけど。約束する。呼んでいるから行く」

「ありがとう」

宇多野さんと2人で編集室に戻ると常務は仕事に戻って編集室には居なかった。

直ぐに円さんに呼ばれて怒られた。

電話をされていて僕が中途半端に仕事を残したからいけないのだ。

「すいませんでした。以後気をつけます」

「いい加減な仕事をするな。中途半端な事しやがって」

「鳴滝、小説の方はどうなっているんだ？」

「今、急いで調整中ですよ」

「調整中、調整中っていつこうに進まねえだろうが」

「そんなにキャンキャン言わないで下さいよ。先月の末から作者と連絡が取れないんです。どうしようもないでしょ、ネットの上じゃ編集部がバラバラになりそうになっていた。」

ギシギシと音を立てながら今にも崩れそうなのが判った。全部僕の所為なんだ。

「イブの会議までに何とかしろ。最悪このプロジェクトは中止だ、俺が責任をとる」

「そんな無茶な。Psyché^{フシケ}はどうするんですか？ 編集長の夢なんじゃないんですか？」

「だから、何とかしろと言っているんだ！」

「円さん、その実は……」

「お前はゴチャゴチャと引つ掻き回すな！ 邪魔だ！ 帰れ！」

円さんが声を荒げて僕に言い放った。

円さんは一日中、足が棒になるくらいまで歩き回って居たんだと思う。

それでも駄目で疲れはてて上からは急かされて身動きが取れなかったんだと思う。

そこに僕が余計な事を言うから。

全て僕が悪いのに……

何も言えずに何も出来ずに、僕は円さんに言われたとおりにするしかなかった。

「すいませんでした。お先に失礼します」

そう言い残して深く頭を下げ、編集部を後にした。

僕と入れ違いでデスクが戻って来た。

「おいおい、何があったんだ？ コオロギの奴。今にも死にそうな顔していたぞ」

「編集長ですよ。頭ごなしに怒鳴り飛ばすから、あのガキじゃ本当に死ぬか居なくなりますよ」

「うるせえ、鳴滝がとっとと進めないからだろうが」

「はいはい、俺の責任です、小説の件は。でも理由くらい聞くべき

じゃないですか？」

「理由だ、そんなのは言い訳に過ぎねえだろ」

「編集長、実は……」

「宇多野ちゃんは俺付きだから、俺が言う。宇多野ちゃんのデータを完全に復帰させたのは悔しいけれどあのガキです。俺達じゃ手も足も出なかった。それをあいつは常盤さん以上の速さで終わらせました。それに時間を取られて自分の仕事が遅れたんですよ！」

鳴滝が机を叩きつけて叫んだ。

「……………」

編集長の円が何も言わずに椅子に座り込んだ。

「相変わらず、しょうがない奴だなアリスは。コオロギは俺が何とかするからお前残りを手分けして片付ける。いいな」

デスクがそう言って香乃木の後を追いかけた。

鳴滝と宇多野が編集長のデスクにやって来た。

「編集長。どの書類を、片付けるのですか？」

「あいつのケツは俺が拭く。2人は自分の仕事をすれば良い……」

編集長の円の声に張りが無くうな垂れて指示を出した。

鳴滝と宇多野は肩をすばめた。

僕が円さんに怒鳴られて編集室を後にして歩いて円さんのマンションに向っていると後ろからデスクの声がした。

走って来たのだろう息が荒くなつて肩で息をしていた。

「おい、コオロギ。少し付き合え。あゝ疲れた」

「デスク？ どうしたんですか？ そんなに慌てて」

「これから時間あるか？」

「家に帰って円さんの夕食作らないといけないから。そんなに時間は無いですけど」

「お前、そんな事までしているのか？」

「だって悪いじゃないですか。家賃払っている訳でもないのに」

「本当にお前は不思議な奴だな。それじゃ、その公園でいいから

付き合え。お前に男同士の話がある」

「判りました」

デスクに連れられて道沿いの公園に向って、途中の自販で温かいコーヒーを買ってベンチに座った。

「なあ、コオロギ。アリスの事許してやってくれないか？」

「えっ、許すもなにも僕の責任ですから」

「そうか、アリスも大変なんだよ。女があんなに癖のある連中を纏めるんだ」

「そうですよね。それに余計なお荷物まで抱えて」

「あんな、あまり自分を卑下するな。お前は良くやっている」

僕は、缶コーヒーを両手で持って膝に肘をつけて誰も居ない街灯に照らされた薄暗い公園の広場を見ながらデスクの話を聞いた。

「デスク。聞いても良いですか？ 何で円さんはその苗字で呼ばれるの嫌がるんですか？」

「それは苗字の有栖川って呼ばれるのが嫌なんじゃなくてアリスと呼ばれるのが嫌なんだよ」

「僕が聞いて良い事か判らないんですけど理由は何ですか？」

「コオロギなら良いだろ、と言うかコオロギに聞いてもらいたくて追いかけて来たんだ」

デスクの思いもよらない言葉に僕は驚いた。

円さんの過去を話すために僕をデスクは追いかけてきた事になる。なぜか追いかけてきた理由のほうに気がなった。

「アリスと俺が親戚なのは知っているよな」

「ええ、初耳です。それ本当ですか？」

「まあ、美女と野獣ほど全く似てないがアリスは俺の姪だ。それじゃここからが本題だ」

「判りました」

僕はデスクの方に体を向けてデスクの顔を見た。

「アリスには大学生の時に付き合っている男が居たんだ。俺が近くに住んでいたのもあって良く相談されたよ。その度に別れると言っ

たのだがあいつは聞かなかった。大好きだったんだろうな、どうしようもないくらい。結婚をちらつかされて貢ぐだけ貢いで身も心もボロボロにされて捨てられたんだ。そして街を彷徨って歩いているのを俺が見つけたんだ。もう少し俺が見つけるのが遅ければアリスは死んでいたと思う。それくらい酷い状態だった。大学卒業を控えた冬の事だ、年は明けていなかったからちようど今時分だな、だからコオロギの事が余計に気になったのかもな。自分と同じように街を彷徨っているお前に」

「円さんにもそんな辛い事があったのですね」

「そして何とか大学を卒業させて俺が今の出版社に強引に入れた。元々アリスには才能があつたのだろうメキメキと頭角を現した。女だからなんて言わせないとその頃からアリスは女である部分を切り捨てた。男に対する反発もあつたのだろう、男言葉になり格好まで男になった。アリスというのは大学時代の呼び名だ。あいつが女の子だった時代の呼び名だから嫌がるんだ。それでも俺はあいつに大切な物を忘れて欲しくなくてアリスと呼んでいる」

「それで、いつもあんな格好であんな口調なんですね」

「なあ、コオロギ。お前はアリスの事どう思っているんだ？」

「えっ？ 僕ですか？ 円さんの事は好きですよ、時々とんでもなく酷い事されるけど優しくしてくれるし」

「アリスは不器用だからな、不器用と言うより怖いのかも知れないな」

「何の事ですか？」

「人を好きになる事、誰かを愛する事。コオロギの事を面白おかしく構うのは愛情表現だよ。時々やり過ぎでお前を困らせるけどな。お前が始めて編集室にやって来たあの日、俺はお前を追い出そうと思っていた。でも賭けをした時アリスはお前を信じて言った。正直驚いたよ。そしてお前がアリスにキスをされて気を失った時に確信したんだ。お前の顔を覗き込んだあの顔は恋をしている顔だと、そしてアリスはこうも言つたお前と一緒に居ると凄く落ち着くと」

「でも、知り合ったばかりですよ」

「恋に堕ちるのに時間は関係ねえよ」

「だけど弟みたいだって言われて」

僕が俯くとデスクが溜息をつきながら僕の肩を掴んで真っ直ぐに僕を見た。

「本当にどうしようもないニブチンばかりだな。香乃木 進、テメエの気持ちはどこにある。お前はアリスとどうしたいんだ？」

「僕は円さんと一緒に居たいですよ、一緒に居たいけど一緒に居れば今回のように迷惑をかけてしまう。僕は円さんと一緒に居ちゃいけないんです」

「香乃木、お前何の事を言っているんだ？」

デスクが怪訝そうな顔をして僕の顔を見た。

「実は今起きている騒ぎは、僕を連れ戻す為に僕の母が手を回しているんです。今までも何回もバイト先に手を回されて首になって。」

それでも僕は実家に戻るのが嫌で逃げ回りました」

「良く判らんが、なんで居場所がバレたんだ。お前はうちに来たばかりだろう」

「たぶん、円さんが良く買い物をする百貨店で僕がカードで買い物したからだと思います。円さんに喜んで欲しくって見栄を張って。」

それが元で円さんを苦しめてしまって、馬鹿ですよ」

デスクは何も言わずに僕の話の話を聞いてくれた。

そしてしばらく2人の間に沈黙が流れた。

空を見上げると半分に欠けたお月様が笑っているように見えた。

「でも、もう大丈夫です。母には手を引かせました。僕が実家に戻り母に従うと言う条件と引き換えに」

「それじゃ、お前……」

「それ以上言わないで下さい、デスク。いや嵐山さん。僕の決心が揺らいでしまうから、僕はここに居てはいけません。円さんの事は大好きですよ、嵐山さんに言われなくても。でも大好きだから

こそ、大好きな人の夢まで壊したくないんです。ゴメンなさいこれ以上は、僕……僕じゃ……円さんを……守れない……」

止め処も無く涙が溢れてきた。

胸が押し潰れそうで苦しくって哀しくって。

デスクは僕が落ち着くまで何も言わず横に座っていてくれた。

「なあ、コオロギ。お前に最後に言っておきたい事がある。自分の気持ちに正直に生きないと一生後悔するぞ」

僕は夜空を見上げて大きく深呼吸をして立ち上がり。

デスクこと嵐山さんの正面に立つと、嵐山さんもきちんと僕を見てくれた。

「僕は一生後悔しても構いません。円さんならきつと良い人と出逢えますよ。だってあんなに綺麗で優しい人なのだから、僕が保障します。何も心配いりませんよ、クリスマスイブにはサンタクロースが素敵なプレゼントをくれるはずですよ」

僕は満面の笑顔で嵐山さんに答えた。

「それとこれ、宇多野さんに渡してください。中を見てもらえれば判ると思います」

「フラッシュメモリーじゃないか」

クリスマス・イヴ

翌朝、僕は少し早起きをして円さんの朝食を作っていた。

ご飯を炊いてお豆腐の味噌汁を作り、出し巻き玉子にほうれん草のおひたし。

それに焼き魚、これぞ日本の朝食って感じなのかな。

「円さん？ 朝ですよ！ 起きてください。円さん？」

僕が円さんの寝室の前で呼ぶと、あの怖い顔で円さんが起きてきた。

「うるさいぞ、コオロギ」

「また、人を殺しそうな寝起き顔ですね」

「お前、本気で殴られたいのか？」

「円さんに殴られるのなら良いですよ」

円さんが目を擦りながら僕の顔を怪訝そうに睨んでいた。

「お前、怒られて凹んでいないのか？」

「僕は男の子ですから、へこたれないです。朝ごはんにしましょう」
テーブルに座って食事にする、円さんの顔は疲れ切った顔をしていました。

それでも味噌汁に口をつけると黙々と食事し始めた。

「コオロギ、お代わり」

「はい、どうぞ」

「急いで食べると消化に悪いですよ」

「うるさい、お茶」

「はい、判りました」

僕は食事をしながら円さんの顔をずーと見ていた。
美味しそうに食べる円さんの顔を。それに気付いて円さんの目が光った。

「なにを見ているんだ？ 俺の事見ていて楽しいか？」

「楽しいというか、嬉しいですよ。ご飯を美味しそうに食べている円さんの顔を見ているのが僕の幸せです」

「バーカ」

円さんが準備をしている間に綺麗に片付け物を済ませた。

編集部に出勤すると電話が鳴りっぱなしだった。

宇多野さんと鳴滝さんが対応に追われていた。

「おはようございます」

「おーす」

「いい所に来た。編集長、取材の問い合わせが殺到しています。3番お願いします」

「3番だな、判った」

しばらくするとデスクと常盤さんも入社してきた。

「おいおい、何の騒ぎだ？ 鳴滝」

「判らないです、朝から電話が鳴りっぱなしで」

「株の方が落ち着いたら今度はここが急騰かよ、まったく」

「おい、コオロギ。原稿取って来い。常盤、お前は取材だ。アリスと打合せしろ」

「はい、了解です」

「うーす」

デスクの指示が的確に飛ぶ。

僕はデスクに言われて原稿取りの準備をする。

常盤さんは円さんと打合せを始めた。

「デスク。あのガキ、今日は妙に元気ですけど昨日なんかあったんですか？」

「さあな、あいつはあいつなりに精一杯生きているんだよ」

「おい、鳴滝。昨日片付けた俺の資料はどこだ？」

「はあ？ 編集長が自分で片付けていたでしょ。ガキのケツは俺が拭くって言って」

「円さん、これですよ、資料。それじゃ行ってきます」

円さんに資料を渡して僕は編集室を飛び出した。

「今日はクリスマスイブだと言うのに残業確定だな」

「鳴滝さん、小説の方どうします？」

「宇多野ちゃんが書くか？」

「そんな悪い冗談止めてください」

「俺も出てくる鳴滝、午後の会議までに何とかしろ。行くぞ常盤」

「は、はい」

「うーす」

編集長と常盤が取材の為に編集室を出ると、デスクが宇多野にフラッシュメモリーを渡した。

「何ですか、これ？」

「サンタからのプレゼントだ」

宇多野が不思議そうな顔をしながらもフラッシュメモリーをパソコンに繋いだ。

「もう、デスクまで。悪い冗談言わ……って、これ『初恋・幽霊の時』の原本データじゃないですか。どこからこんな物」

「宇多野ちゃん、今はそんな事言っていないで会議の資料だ。時間が無い」

「鳴滝さん、判りました」

宇多野と鳴滝は大急ぎで午後の会議の資料を作り始めた。

一時間ほどで僕が原稿を持って編集室に戻るとデスクが窓の側に座って窓の外を眺めていた。

「デスク、戻りました。これ原稿です」

「俺の机に置いておけ」

「はい。他の皆はどうしたんですか？」

「アリスと常盤は出たまんま、鳴滝と宇多野は会議室で資料の準備をしているよ。山ノ内は相変わらず鉄砲玉だ」

「あはは、山ノ内さんとは1回も会えなかったな」

「なあ、コオロギ。本当にこれで良いのか？」

「良いんです、これで。最後に楽しい思い出が出来ましたから。こ

れ円さんに渡して置いてください」

僕は、デスクに綺麗にラッピングされた細長い箱と一通の手紙を託した。

「これは？」

「今日はクリスマススイブですから。そろそろ時間なので僕はこれで、皆に宜しく伝えてください。突然現れて、突然居無くなる事を許してください。ありがとうございます。本当に短い間でしたがありがとうございました。御座いました」

僕はデスクに深々と頭を下げ、楽しかった思いを胸に編集室を後にした。

「間に合った。これで、編集長の首も繋がったよ」

「でも、どうしてデスクがデータ持っていたんでしょね」

鳴滝と宇多野が編集室に会議の準備を終えて戻ってきた。

2人が編集室に入るとデスクは書類の整理を、常盤は相変わらずパソコンに向って仕事をしていた。

「あつ、デスク。聞いても良いですか？ あのデータは誰が？」

「お、お疲れさん。コオロギだよ。あいつが作者だったんだ。」

「えっ？ 今、デスク何て？」

「あのガキがですか？」

「鳴滝、コオロギはお前が思っている程ガキじゃねえよ。コオロギから直接預かったのだから間違いない。仕事も住む所も失い、アリスに振り回されて小説どころじゃなかったのだろう」

「それじゃ、あのガキはどこに居るんですか？」

鳴滝の問いにデスクは答えず窓の外を見た。

そんなデスクの姿を見た宇多野が大きな溜息をついた。

「やっぱり、帰ってしまったんですね」

「宇多野は何か知っているのだな」

「私、偶然に香乃木君の電話しているのを聞いちゃったんです。円さんに助けてもらわなければ僕は死んでいた、死ぬのなんか怖くな

い。クリスマスに帰るって途切れ途切れで良く聞こえなかったのですが、そうしたら香乃木君が話してくれたんです。僕には会った事も無い許婚がいて20歳の年のお正月に結婚しなきゃいけないんだって、それが嫌で逃げ回っていたと言っていました」

「とことん逃げ回ればいいじゃねえか、だからあいつはガキなんだ！」

「そうは行かなくなっただよ。今回の件で」

「今回の件？ 何をさっきから訳判んない事言っているんですか、デスクは？」

鳴滝が苦々しい顔をしてヒートアップしてデスクの嵐山に噛み付いた。

「株の買収、取材拒否の一連の騒ぎはコオロギの母親がコオロギを連れ戻す為に起こしたんだ。今までも何度と無く仕事先に手を回されてコオロギはバイトを転々としていた。そしてアリスと出会った。アリスを守る為に母親と取引をしたんだ。手を引かせるために実家に帰る事と恐らく結婚を了承したのだろう」

「ガキじゃないですかまるで、ガキが考えそうな事だ、守りたいのなら側に居て守れば良い。大体嫌がらせされたぐらいで潰れるような会社じゃないし取材拒否だって他を取材すれば良い事じゃないですか」

「それは、どうかな」

常盤がパソコンのマウスを操作しながらボールペンを咥えて口を挟んだ。

「常盤さん、どう言う意味ですか？」

「？財閥、頭首・香乃木 薫 かつら？流古武道宗家 かつら 最高師範 コオロギの母親だ。俺等が束になっても蛙の面に小便だ。女系家系だと聞いたことがある。父親はコオロギが幼い頃に他界。どんな事をしてモコオロギを連れ戻すだろうな」

「常盤、お前知っていて」

「知っていてどうするんですか？ デスク？ 言っただしょ蛙の面

に小便だつて」

「？財閥つて……デスク……」

「うちを潰す事なんて赤子の手を捻るより簡単だ。だからコオロギは逃げ回るのを止めた。これ以上周りに迷惑を掛けない為に」

鳴滝が納得の行かない顔をした。

「それじゃ、デスク。あのガキは……」

「そう、惚れた女の為に自分の人生と自分の本当の気持ちを切り捨てたんだ。アリスの夢を守る為にそして俺達に迷惑を掛けないようにな」

「ああ！ ム力つく！ ガキじゃねえ、大馬鹿野郎じゃねえか」

「デスク、何とかならないんですか？」

鳴滝が声を荒げ。宇多野がデスクに哀しそうな目で問いかけた。

「無理だな、住所くらいは判るが。コオロギがそこに居るとは限らない、それに俺達が首を突っ込んで良い問題じゃないだろ、アリス次第だ。しかし手詰まりだな、コオロギの居所がわからなければ」そこに編集長の円が戻って来た。

「アリスのご帰還だ。鳴滝、会議の準備をしろ」

「俺、嫌です」

「お前に何が出来る！ コオロギの気持ちを少しでも汲んでやれ！

一番辛いのは誰だ？ テメエか？ 鳴滝！」

デスクの嵐山が鳴滝の胸倉を掴んで怒鳴り飛ばした。

「おいおい。俺が戻るなり何の騒ぎだ、一体？ デスク、何を熱くなっているらしくねえぞ。鳴滝、行くぞ」

「判りました。デスク、すいませんでした」

鳴滝がデスクの手を振り解いて頭を下げて編集長の円と会議に向つた。

「ほれ、宇多野。しょぼくれて居ないで仕事しろ」

「は、はい」

「しかし、どうしたものかな」

デスクの嵐山は深い溜息をついて天井を仰いだ。

イブの会議は日が暮れるまで続いた。

会議が終わる頃には夜の帳が下りて街にはクリスマスソングが流れ、星空が舞い降りて来た様にイルミネーションが光輝いていた。編集室では会議の終わるのを皆が待っていた。

デスクの嵐山は椅子に座り腕を組んで天井を見上げ。

無精髭を生やした常盤はボールペンを咥えパソコンのモニターを見ながら。

三つ編みメガネの宇多野はほお杖を突いて溜息を量産していた。

そこに編集長の円と鳴滝が編集室に戻って来て円が皆に声を掛けた。

「よし、会議も大成功だ。久しぶりに飲みに行くぞ！ 鳴滝は何でそんなしけた顔しているんだ？」

「アリス、コオロギからクリスマスプレゼントだ」

デスクが円に香乃木から預かっていたプレゼントと一通の手紙を渡した。

「へえ〜でコオロギは？」

「いねえよ」

「あの馬鹿、しょうがない奴だな」

そう言いながら円がプレゼントをあける。

綺麗にラッピングされた箱のリボンを解いて箱を開ける。

箱の中には世界一美しい蝶と呼ばれているモルフォの綺麗なメタリックブルーの本物の蝶の羽を使った、蝶の形のペンダントトップのネックレスが入っていた。

手紙には急に実家に帰らなければならなかった事とお世話になった礼が綴られていた。

「そうかコオロギは実家に帰ったのか。いらねえ気なんか使いやがってこんな蝶のネックレスなんか置き土産にしゃがって最後まで小賢しい奴だ」

「蝶ですか、プシケですね」

「宇多野、しゃれた事言うなお前も、やっぱり俺と違って女の子な

んだな」

「良いんですか？ 編集長、香乃木君このままで」

「コオロギは自分の意思で帰ったんだ、それで良いじゃねえか」

そこに髪の毛の短いツンツンヘアの背の高い痩せ型の大学生風の男が編集室に駆け込んできた。

「あれ？ 皆さんおそろいでどうしたんすか？ 今日はイヴなのにまるで葬式か通夜みたいすよ」

「山ノ内、俺に挨拶は？ いつも鉄砲玉みたいに飛びまわりやがって」

「あつ、編集長。休みください」

「てめえ、殺すぞ。この忙しいのに休みくれだあ？」

編集長の円が凄んでも山ノ内はヘラヘラとしていた。

「いや、急に実家の親父が帰って来いつて。何でも得意先の？^{かつら}流古武道宗家で急に婚礼が決まったから店手伝えつて急にいわれたんすよ。実は俺んち地元じゃかなり有名な八百屋なんすけどね」

「おい、山ノ内。テメエ、今なんていった！」

「な、鳴滝さん？ いきなりなんすか？」

「どこの婚礼だつて？」

鳴滝がいきなり山ノ内の胸倉を掴むと山ノ内が突然の出来事に動揺していた。

「な、なんすか？ 俺の地元にある？ 流古武道宗家ですよ。でっかい屋敷であそこの一人息子は中学の時の後輩すから」

「はあ？ そいつの名前は？」

「こ、香乃木 進つて奴でチビで童顔の」

「ふっはははは……鳴滝、離してやれ。山ノ内、婚礼はいつだ？」

デスクの嵐山が笑いながら鳴滝と山ノ内に言っていると、鳴滝が手を離す。山ノ内が胸を撫で下ろしながら答えた。

「明後日が結納で、たしか婚礼は正月あけて親父が言っていたよ。うな。だから慌てて戻って来たんすよ。そうしたら怒鳴られるばかりで、訳わかんないすよ」

「俺が許可するから好きなだけ休め。連絡は入れるよ」

「あざーす。失礼します」

山ノ内は鉄砲玉の様に編集室を出て行った。

「おい、アリスどうする気だ？ お前、会議前の俺等の会話聞いていただろう」

「えっ？ 編集長？」

「宇多野なんだ、その顔は。俺は聞いてねえよ、何の事だ？」

「惚けるな、俺が気づかないとでも思っているのか？ アリスの態度をみていれば直ぐに判る。俺とお前は腐れ縁だぞ、伊達に腐るほど付き合っている訳じゃねえんだ」

見透かされて円が肩を落として溜息をついた。

「俺なんかと居るより実家で結婚した方が何不自由なく幸せに暮らせるだろ」

編集長の円が窓の外に顔を背けた。

「編集長、良いんですか？ 俺はああゆう馬鹿は大好きですよ、最初は大嫌いでしたけどね。俺には真似出来ませんよ。たかが^{ブシ}Psycheなんて女性誌を守る為に自分の人生切り捨てるなんて事は。あいつはガキなんかじゃなかった。俺より大馬鹿な男だった」

「編集長、迎えに」

「行かねえ、俺が行ってどうする。おめでどうでも言うのか？」

「パーン」 宇多野が円の頬を平手で打ち抜いた。

宇多野の目には涙が零れそうになっていた。

「最低！ 私は編集長がそんな腰抜けだと思わなかった！ こんな人に今まで付いてきたのかと思ったら、自分に腹が立ってきた！

鳴滝に^{フシユケ}Psycheなんて雑誌とまで言われて自分の夢だなんて言っていたくせに！ 香乃木君は編集長の言った通り編集長なんかと居ない方が幸せかもね。俺様のプライドはどこに行ったの？ 鳴滝、朝まで飲むから付き合え！」

「宇多野ちゃん？ おいおい、そんなに引く張るなって」

宇多野が怒り狂ったように叫んで鳴滝の腕を掴んで編集室を出て行

った。

「常盤は今夜どうするんだ？」

「デスク、いつもの所に居るんで」

「おー、お疲れ」

常盤が編集長に一礼して編集室を後にした。

「結局、皆コオロギの事が好きだったんだな。不思議なやつだよなコオロギは」

「馬鹿な奴だよ、まったく」

「大馬鹿だな、コオロギはお前の本当の気持ちを知らないまま。一生後悔するんだろうな」

「なんだそれ」

「アリスがコオロギを怒鳴り飛ばして帰した夜に、コオロギにあいつの本心を聞いたんだ。あいつ、泣きながら言っていたよ。大好きだから大好きな人の夢を壊したくないってな、自分では守れないからって。そんな事言いやがる、だから俺は聞いたんだ。自分の気持ちに正直にならないと一生後悔するぞって。そうしたら俺を見据えて言いやがったんだ。僕は一生後悔しても構いません。円さんならきっと良い人と出逢えると、綺麗で優しい人なんだから、僕が保障しますってな。お前の所にはサンタクロースが来てお前の夢とその蝶のネックレスを置いて行った。そして俺らには小説のプロジェクトをプレゼントしてくれた。でも、あいつの所にはサンタクロースは来ない」

「馬鹿みたい、私なんかの為に」

「そうだな、アリスと出会わなければコオロギは今頃死んでいたのかもな、あの時のお前のように。仕事なら何回もやり直せるが人生はやり直せねぞ。自分の気持ちに素直になれ、どいつもこいつも二ブチンなんだ、言葉で伝えねえとわからねえぞ。これ以上俺達は何も言わない、アリスの好きなようにしろ」

香乃木家

僕は編集部を辞めた日の夜に実家に戻った。

翌日から僕の周りにはバタバタと結納や婚礼の準備に追われていた。

僕は縁側に座り庭から見える門を見ていた。

あの門の外には自由があった。

昨日の事なのになんとか懐かしいような気がした。

「ほら、進。邪魔だ、どけこの役立たず」

「痛いよ、一美姉さん」

「お前がそんな所でボーとしているからだ」

「ゴメンなさい」

縁側に座っている僕を蹴り飛ばしたのは長女の一美姉さんだ。またここに帰ってきてしまった事が体感できる。

「お母様。あれ、何とかならないの？ あんなのに継がせるのなら私が継げば良かった」

「あらあら、困ったものね」

僕は家に居る時は一切反抗や口答えする事を止めた。

そんな事をすれば倍以上に返って来るからだ。

まあ、大人しくしていてもあまり変らないのだけど。

それはそれでしょうがない事なのだと思うていた。

「おい、進。お前本当に結婚する気があるのか？」

「三波姉さんは何を言っているの、戻ってくるように仕向けたのは誰なの？」

「だから進は駄目なんだ」

「そんな事、子どもの頃から知っているよ、散々言われ続けたからね。僕には何の力も無いから」

屋敷のどこに居てもこんな感じだった。

僕と一番歳の近い三波姉さんでもこんな感じなのだ。仕方なく縁側を後にする。

「あの、ボケナス。私が結婚すれば良かった」

「あらあら、三波もそんな事言わないの」

「だって、あんなのと結婚する人が可愛そうでしょ」

自分の部屋に行こうと2階に上がると今度は双葉姉さんに出くわした。

「進、どこに行くんだ？」

「自分の部屋だよ。双葉姉さんには関係ないでしょ」

「お前の為に皆準備しているんだろ」

「僕の為じゃないでしょ、家の為でしょ。僕の意味なんかどこにも有りはしない」

「お前、覚悟を決めて帰って来たんだろ」

「覚悟を決めて帰って来たよ。約束だからね、それで良いでしょ。僕がここに居れば何も問題は起きないんだ」

「進、お前家を継ぐ気あるのか？ お嫁さんに対して失礼だろ」

「何を言っているの？ 一度も会ったことの無い相手に対して思う事なんか1つも無いよ」

次女の双葉姉さんが眉間に皺を寄せて、僕を睨みつけながら掴みかかってきた。

「進は本当に人間の屑だな」

「人間の屑のほうがまだマシだよ、僕はただの木偶人形みたいなものだからね。手を離して、姉さん達に僕の気持ちなんて判らない。判ってもらいたくも無いけどね」

そう言っつて自分の部屋に戻った。

「あつ、お母様」

「進は？」

「部屋に引き籠り。あの馬鹿、ギッタングिटタンのボコボコにして家から追い出してやる」

「あらあら、双葉まで。面白い事になりそうね」

編集室はとても静かだった。

「なあ、デスク。どうなるんだ？」

「俺に聞くな、鳴滝。覚悟だけは決めておかないとな」

三つ編みメガネの宇多野は窓の外を眺めていた。

「でも、昨日。編集長が出勤して来た時には、本当に私ここを辞めようと思いました」

「まあ、アリスの覚悟だけですまなければ辞める事になるだろうな」
デスクの嵐山の手には円の辞表があった。

そこに常務が慌てて駆け込んできた。

「おい、嵐山。どうなっているんだ？」

「はあ？ 入稿は終わっていますよ」

「そうじゃない、円君はどうした」

「昆虫採集に行きましたよ。虫取り編みと虫簞を持って閻魔様の所に2、3日で戻ると思いますよ」

「必ず、事の顛末を報告しろ。いいな」

そう言い残して常務が編集室を出て行った。

翌日、結納の日は僕の心の中とは裏腹に抜けるような青空が広がっていた。

紋付羽織袴を着せられて座敷には緋毛氈が敷かれ。

結納の品々が白木の献上台に綺麗に並べられていた。

祝いの席と言う事もあり、屋敷には？流古武道の28支部の支部長も集められていた。

結納が終われば僕の人生も終わる香乃木 進が死ぬ訳ではないが、

香乃木 進と言う器だけが生き続けるだろう。

まだ、相手の女性は到着していなかった。

門の方に目を向けると門前に1台のタクシーが止まるのが見え中から1人の女性が降りてくるのが見え、僕は声を失い目を疑った。

その女性は黒い長い髪を風に揺らしながら鼻筋の通った顔をこちらに向けて歩いてくる。

黒いパイズリー柄のワンピースを来て軽くて温かそうなアイボリー

のカシミアのコートを羽織って、大きく開いた胸元にはとても綺麗な青い蝶が揺れていた。

その女の人が門をくぐるなり叫んだ。

「コオロギ！ 帰るぞ、俺の下僕が勝手な事しやがって、出て来い！」

「円さん、何で……」

窓を開けて庭に下りると着物姿の母が円さんに向って歩いて行くのが見える。

すると僕の方を見て僕の近くに居た双葉姉さんと三波姉さんに指示を飛ばした。

「双葉、三波。進を取り押さえないさ！」

「お前はここに居ろ！」

「進は動くな！」

母の声に反応した2人が僕を後ろから羽交い絞めにした。

「離せ、離せよ！」

「コオロギ！」

僕の姿を見つけた円さんの叫び声が聞こえる。

僕は姉2人に頭を押さえ込まれて顔を上げることすら出来なかった。

「祝いの席に土足で踏み込んできて、ただで済むと思ってらっしゃるのかしら。あなたの会社など潰す事などなんとも無いのよ」

「もう、俺はあの会社とは何も関係ない。俺は有栖川 円だ、コオロギを返してもらっ」

母と円さんの会話が聞こえてくる。

何で会社を？

どうして僕なんかのために？

円さんの夢を僕が……

「誰を返せとおっしゃっているのかしら。財産目当てでしょ。進はあなたの様な女だか男だか判らないような人には渡しません。会社に戻り、体でも武器にしてくだらない雑誌でも作っていなさい」
財産目当て？

体を武器に？

円さんが夢だと言った雑誌を……

沸々と湧き上がり赤々と燃え盛るマグマの様に怒りがこみ上げてくる。

「言いたいのはそれだけか？ あいつは俺が連れて帰る」

「？流古武道宗家 最高師範 香乃木 薫を舐めるのも大概にしないかい。今度は口の中を切っただけじゃ済まさないわよ」

音に驚いて力任せに顔を上げると円さんが座り込んでいての口元から一筋の血が流れていた。

それを見た瞬間、僕の中で何かが弾け飛んだ。

「ウツワアアアア——！！」

何が起きたのか自分自身でも判らなかった。

雄叫びを上げて力任せに起き上がり後ろから羽交い絞めにしている
双葉姉さんと三波姉さんを掴み、体を捻り回転させながら振りほどく。

2人の体がふわっと、宙に舞い上がった。

双葉姉さんは何とか受身を取ったが、三波姉さんは受身も取れず地面に叩きつけられた。

「？流古武術 木の葉返し？」

双葉姉さんのそんな声が聞こえてきた。

そんな事に構わずに円さんの元に向い走り出した。

「円さん、何でこんな事を」

円さんの前に座り懷からハンカチを出して円さんの口元の血を拭き取ると、円さんの吸い込まれそうな茶色がかつた切れ長な瞳から大粒の涙が溢れ出した。

「こ、コオロギはもう居ないと思ったら……胸が潰れそうに苦しくなってる……」

「しょうがない人だな、決心が揺らぐじゃないですか」

「私……コオロギが……好き……大好きなの……うううう……どこ

にも行かないで……」

円さんが僕に抱きついて泣き出した。

まるで小さな女の子が体を震わせながら泣き叫ぶように。

優しく抱きしめると円さんのいい匂いがした。

「もう、どこにも行きませんから。ね」

円さんの体を抱き上げて門の下に座らせる。

「僕を信じて、ここで待っていてください。必ず迎えに来ますから」
「うん」

円さんの顔を覗き込んで頭を撫でると円さんが小さく頷いた。
立ち上がり母の正面に立ち対峙する。

「円さんを侮辱する事も傷つける事も僕が許しません。それが例え親のあなたであつても」

「あなたに何が出来るの？ 何も出来ずに逃げ帰って来たあなたに」
母の目を睨んだまま羽織を脱いで地面に落とした。

「あなた、その意味が判って居るんでしょうね」

「これが僕の本当の決心です」

「判りました」

僕の目を射抜くように母が見つめて大きく息を吐き振り返った。

「双葉、三波を片付けて四神二十八宿の準備をなさい」

「しかし、お母様。はい、判りました」

双葉姉さんが母の気迫に押されて、三波姉さんを起こし肩を組んで
屋敷に入っていく。

「進、あなたも準備なさい」

僕は何も言わずに円さんの元に向った。

円さんは少ししゃくり上げていたが大分落ち着いたようだった。

「こ、コオロギ、何が……」

「ガチンコの勝負です。何が起るか判りませんが、僕がもし負けた
時は僕の事は忘れてください。良いですね」

「私は、コオロギを信じる。私の下僕なのだから」

「ありがとうございます」

円さんが真っ直ぐに僕を見て言ってくれた。

おでこにキスをして立ち上がり母に一礼して屋敷に戻った。

「円さんと言いましたか？ 公平を期す為に少し説明をさせていただきます。四神とは青龍の進、朱雀の三波、百虎の双葉、玄武の一美をそう呼んでいます。そして二十八宿とはその下つまり？流古武道28支部の支部長を言います。支部長全員と手を合わせして無事通り抜ければ四神とそして最後は黄龍の私と勝負します。進が勝ち抜ければ願いを聞いて差し上げましょう」

「あなたは着物のままで……」

「あなた、進が私の所までたどり着けると思っているのかしら。進は18までしか鍛錬を積んでいない。今まで黄龍までたどり着いたのは私が知る限り祖父ただ1人、今回は青龍の進が挑み、朱雀の三波が使えない為に四神は2人、ちょうどいいハンデかしらね。あなたが手出しすれば進の負けが確定する。そろそろ準備が出来たよね」

僕が道着に着替えて庭に出ると僕より遥かに体の大きな28人の支部長がウォーミングアップをしていた。

その向こうには一美姉さんと双葉姉さんが道衣に袴姿で仁王立ちしている。

その少し後ろに母が門の所に円さんが立って僕を見ているのが見えた。

裸足になり軽く体を動かし深呼吸をする。

僕に気付いたのか師範達が2列に並び待ち受ける。

18までは鍛錬していたとはいえ2年のブランクがあり小柄な僕には長期戦は不利だ。

そして師範に打撃を加えても急所をピンポイントで狙わなければ効果が無い事は重々承知だった。

一点突破を狙うしかない。

「セイ！」

気合を入れた掛け声と共に師範達のだ真ん中目掛けて走り出す。突きを受け流しこめかみにハイキックを打ち込み。

蹴りを掻い潜り懷に潜り込み突きを放つ。

立ち止まれば確実に仕留められてしまうのは目に見えていた。

右から突きを打ち込まれる。

腕でガードするが体の軽い僕は弾き飛ばされてしまった。

歯を食いしばり着地と同時に全身のばねで飛び上がり。

顔面目掛けて蹴りを繰り出す。

そのまま数人の師範の上を跳び越すが着地点に入られて蹴りが左脇に突き刺さる。

ガードなどほとんど効果も無く吹き飛ばされてボールの様に地面を転がった。

「がはっ！ うえええ、げほげほ」

未消化の胃の内容物がいやおうなく口から穿き出る。

止まってはられない。

走り出し袖で口を拭う。

蹴りを飛び越しそのまま顔面に膝を打ち込む。

攻撃が最大の防御なのだ。

蹴りを受け流し。

鳩尾に突きを放つ。

崩れた相手の体を駆け上がると。

下からアッパー気味の突きを受ける手で堪え。

反動を利用して体を回転させ肩に踵を打ち込んだ。

着地すると数人の師範の向こうに一美姉さんと双葉姉さんが腕を組んで笑っているのが見える。

間を縫うように走り込むと両脇から同時に段差で回し蹴りが飛んでくる。

無意識に蹴り出された2本の足に向かい飛び込んでいた。起き上がると突きが顔面目掛けて打ち込まれる。

寸で交わすが頬をかすり痛みが走る。

フック気味に突きを打ち抜きそのままの勢いで体を回転させて左手でもう1人に裏拳を懐に打ち込んだ2人の師範の体がぐらつくと道が開けた。

片膝を突いて息を整えていると双葉姉さんが走りこんできた。

体制を整える暇も無く左から蹴りが飛んでくる。

何とかかわし軸足を払おうとするとそこには軸足が無く後ろ回し蹴りが頭目掛けて飛んできた。

鉄骨で殴られた様な衝撃を受けガードごと吹き飛ばされた。

起き上がると軽い脳震盪を起こしフラフラした。

「？流古武術 旋風つむじ」

双葉姉さんの声が聞こえ、気付くと一美姉さんが視界から消えていた。

殺気を感じ振り返ると目の前に蹴り足が見える。

咄嗟に腕をクロスさせガードするが後ろに吹き飛ばされた。

「余所見していると殺すぞ」

情け容赦なく攻撃してくる。

2人相手では分が悪い何として1人ずつ仕留めるしかない。

起き上がる間もなく拳を打ち込まれる。

体のばねで一気に置きあがると姉2人に蹴りで挟み撃ちにされてしまふ。

全身に力を入れて腕でガードするが衝撃が体の芯まで響き体から力が抜ける。

膝から崩れた所に2人に回し蹴りを同時に叩き込まれ壊れた人形の様になり飛んだ。

「死んだか？」

「これで、終いだ」

遠のく意識の中でそんな言葉が聞こえてくる。

「コオロギーー!!」

円さんが僕を呼ぶ叫び声で、辛うじて意識が繋がる。

目を開けると頭の上から拳が振り下ろされる。
拳を掌底で受け両足を一美姉さんの首に巻きつけ体を捻り投げ飛ばす。

起き上がると後ろから双葉姉さんの突きが飛んでくる。

体を屈め後ろ蹴りを放つと踵が鳩尾にめり込んだ。

「かはっ」

と小さく息を吐いて双葉姉さんの体が崩れ落ちた。

時間が無い体力は限界に近かった。

意識は朦朧としていて、辛うじて一美姉さんの攻撃を避けていた。

「はあ、はあ、はあ……」

自分の呼吸音だけが聞こえる。

次で決まるそう思った瞬間、一美姉さんの上段の蹴りが炸裂する。

咄嗟にかわすが右頬の皮膚が裂けて血が流れる。

体を回転させ肘を一美姉さんのわき腹に打ち込む。

「うげえ！」

うめき声が上がリやったかと思った瞬間、一美姉さんが体を反転させた。

一美姉さんの膝蹴りが僕の鳩尾に食い込んだ。

「げえあっ」

胃の中には何も無く血反吐を吐いた。

「あっああああ……」

やられる、そう思ったが背後で何かが倒れる音がした。

腹を押さえ血反吐を吐きながら立ち上がり振り返ると一美姉さんが地面に倒れこんでいた。

黄龍こと？流古武道宗家 最高師範の母の方へフラフラと歩き出す。

「はあ、はあ、はあ、はあ……」

母の後ろでは円さんが泣きながら首を振っていた。

「もう、止めて……死んじゃう……お願いだから。もう、止めて……」

道着で口を拭き、円さんに微笑み返す。

母の前で、静かに息を吸うと意識がフェードアウトしながら体が膝から崩れ落ちる。

母が崩れ落ちる僕の体に拳を叩き下ろした。

「駄目ええええー」

円さんの絶叫が遠のく意識の中で聞こえる。

僕に柔らかい物が覆いかぶさり。円さんの優しい匂いがする。

刹那、意識が繋がり体を捻り円さんの体を庇い抱きしめ、背中に叩き込まれるだろう母の渾身の突きに身構える。しかし、拳は打ち込まれず母の声の頭の上から聞こえた。

「香乃木 進、あなたを？流古武道宗家より破門いたします」

そこで僕の意識が途切れた。

居場所

どれだけ時間が経ったのだろう目が覚めると、どこかで見た事があるような天井が見えてきた。

ここはどこだろうそう思い体を動かそうとすると全身に痛みが走っている。

しばらく動かないで居るともの凄く近い所から寝息が聞こえてくる。そして右腕には何かとても柔らかい物を感じた。

少しだけゆっくり寝返りをうつと目の前に円さんの寝顔があった。

そして腕に当たっていたものは円さんの形の良い胸だった。

そして良く見ると円さんは裸だった。

思わず仰け反ると全身に激痛が走り思わず声を上げてしまった。

「うぐうう……あっあああ……はあ、はあ、はあ、はあ」

痛さで呼吸が荒くなる。

少しでも息を大きく吸い込むと、また痛みが走った。

「痛っううう……」

堪らず目を瞑り呼吸を整える。

目を開けると、円さんも目を覚ました。

「無理に動いたら駄目よ」

「ここは？」

「私の部屋」

私の部屋？

と言う事は円さんのマンション？

見た事があるような天井のはずだった。

しばらく何も考えずに腹式の深呼吸を繰り返すと体がだいぶ楽になってきた。

幼い頃から姉にサンドバックにされてきたので打たれ強い体になっていたのだろう。

体が楽になり頭がはつきりしてくると今の状態は拙いと思い体をそつと動かすと円さんに抱きしめられた。

「動かないの」

「円さん、何で裸なんですか？」

「私、寝る時はほとんど下着1枚だから。コオロギには全部みせたでしょ」

いや、確かにあれは不可抗力で見たくつて見た訳ではなく。

「コオロギの体も全部見せてもらったから」

「へえ？」

一瞬、頭の中が真っ白になる。

腕を持ち上げると確かにパジャマを着ていた。

体を拭いて手当てをして着替えさせてくれたのだろう。

しかし、何で円さんのマンションに居るのが判らなかった。

「ねえ、コオロギ聞いて良い？」

「なんですか？」

「なんでこつちを向かないの？」

「恥ずかしいからです」

「あつそ」

円さんが寝返りを打って顔を背けたのが判った。

仕方なく体を少し起こして円さんの方を向けて自分の右腕を枕にして顔を少し上げて、円さんの鼻を左手で摘んだ。

「なに拗ねているんですか？」

「コオロギが大嫌いだから」

もうこんな布一枚で密着状態になってしまったら照れていてもしょうがないのだ。

「僕は円さんの事、大好きですよ」

「何で面と向って言わないの？」

そう言いながら円さんが眉間に皺を寄せて僕を睨んだ。

「恥ずかしいからです」

少し意地悪に言つと円さんが少しだけ奥歯を噛み締めるのが判った。

円さんの口元を見ると少し痣になっている、母に平手打ちされた為だろう。

「痛くないですか？」

「少しだけ」

「痛くなくなるおまじないをしてあげます」

僕がそう言つと円さんが少し怪訝そうな顔をした。

「大好きです」

そう言つて口元に軽くキスをした。

「ちゃんとして」

円さんに言われ優しく口付けをすると円さんの体が小さく震えていた。

声を掛けようすると円さんが抱きついてきた。

「死んじゃったかと思つたんだから……」

優しく抱きしめると円さんは僕の胸に顔を埋めて泣いていた。

円さんがそう思つたのも仕方がないのかも知れない血反吐を吐くまでボロボロにされたのだから。

「ゴメンなさい」

僕にはこんな言葉しか思いつかなかった。

すると枕元にあつた円さんの携帯が鳴つた。

「もしもし、俺だ」

「デスク？」

その電話はデスクの嵐山さんからだった。

何となく聞こえる話の内容は僕が一度も会つたことのない山之内さんが誰かにお金を掴まされて嘘を付いて休みを取ったとかそんな内容だった。

「今日は無理だ。明日の午後顔を出すから、ああん？ コオロギ？
ここに居るぞ」

円さんが僕に携帯を突き出した。

「デスクですか？ ご迷惑をおかけしてすみませんでした」

「コオロギ、明日、アリスと一緒に会社に顔を出せこれは命令だ。」

「良いな」

「えっ、でも」

「文句なら明日聞いてやる。いいな」

返事をしようとする円さんが急に体を起こした為に体に痛みが走った。

「痛ったああ……」

「おい、コオロギ大丈夫なのか？ アリスに襲われてないだろうな」

「ははは、デスク。円さんは……」

そこで円さんが携帯を僕の手から奪い取った。

「誰が襲うか、クソ親父！」

携帯を切って円さんが携帯を投げ捨てた。

溜息についてゆっくりと体を起こすと部屋の中に違和感を覚えた。

「円、起きたの？」

不意に部屋の外で女の人の声がするといきなり部屋のドアが開いて、グレーのカットソーに黒いパンツルックでエプロンを付けたとても綺麗な少し年配の人が顔を出した。

「また、こんなに部屋をちらかしてしょうがない子ね」

「……………」

何が起きているのか判らず僕が固まっていると背中に柔らかいものが押し付けられ、後ろから円さんが抱き付いてきて僕の肩に顎を乗せた。

「母さん、もう良いから」

「ちゃんとしなさい」

「へえ？ ま、円さんのお母さん？」

僕は裸の円さんに後ろから抱きつかれてベッドの上にいる。

普通ならあり得ない状況を円さんの母親に見られてしまっているのだ。

何も言えず俯いてしまった。

「うふふ、可愛い。真っ赤かよ、あなたがコオロギさんね。円

から話は聞いているわ、とても優しくって身の回りの世話をしてくれる素敵な男の子と暮らしているって。体の方は大丈夫かしら？」

「は、はい……」

「もう驚いちゃった。円が泣きながら電話をしてきて『コオロギが死んじゃう』って、マンションに来てみたらボロボロのあなたが寝ていて体を拭いて簡単にだけど手当てをしたのだけど」

「あ、ありがとうございます。体は何とか大丈夫みたいです」

「円ったら恥ずかしがって手伝おうともしないのよ。こんながさつで仕事以外何も出来ない娘ですが宜しくお願いね」

円さんは何も言わないので気になり円さんの方を見ると顔を真っ赤にして僕を抱きしめる手に力がはいつていた。

「こんな格好で大変失礼だとは思いますが。挨拶が遅れて申し訳御座いませぬ。僕は香乃木 進と言います。若輩者ですがこちらこそ宜しくお願い致します」

今の僕には誠心誠意頭を下げる事しか出来なかった。

「いえいえ、とんでもないわ。とても礼節をわきまえていらっしやるのね。これで私も肩の荷を降ろせるわ。円、お粥を炊いてあるから香乃木君にちゃんと食べさせてあげなさい。良い事」

「うん、判った」

「それじゃ、私はこれで失礼するわね」

円さんのお母さんが軽く会釈をして部屋から出て行った。

「円さん似の素敵なお母さんですね」

「うん」

円さんが僕を見つめている。

ゆっくり顔を近づける。

「うふふ、ありがとうございます。コオロギちゃん。ラブラブね。バイバイ！」

円さんお母さんがドアから顔を出してそんな事を言って走り去った。

僕と円さんは真っ赤になって俯いてしまった。

円さんのお母さんの笑顔は悪戯っ子みたいな円さんの笑顔に良く似ていた。

「あの、もしかしてお母さんが部屋を片付けていたんですか？」

僕が違和感を覚えたのは円さんの部屋がお世辞にも綺麗に片付けられて居るとはいえなかったからなのだ。

「うっ、だって嫌われると思ったから……」

「僕の体を全部見たのも嘘なんですね」

「ご、ゴメンなさい……」

円さんが俯いてシユンとしている。

僕の人を見る目が無いのが良く判ったが円さんがとても可愛い女の子なんだと言う事は見抜けていたみたいだった。

円さんが愛しくなり頭をやさしく撫でた。

「こんなに可愛い円さんを嫌う訳ないじゃないですか」

ブシューーッと音が出るくらい円さんが真つ赤になって床に置いて？ あったシャツを羽織ると部屋を飛び出してしまった。

しばらくすると円さんがお粥を持ってきて、食べさせてもらいながら僕が実家で気を失って倒れた後の事を聞いた。

「香乃木 進、あなたを？流古武道宗家より破門いたします」

「ええ、お母様。それじゃ進は？」

一美が双葉を抱き起こし啞然としている。

「跡取りとは認めません」

「でもそれじゃ……」

「あらあら。ご自分達が言った言葉は忘れていないでしょうね」

そう言われて2人の姉は息を飲んだ。

「一美は自分が継げば良かったと、双葉はギツタンギツタンのボコボコにして進を追いつくと。そして三波は私が結婚すれば良かったと言いましたよね、確か？ ねえ三波」

薫が縁側に立つ三波に微笑みかけると三波はガタガタと震えていた。「こうなった大本の原因はあなた達3人が進を弄り倒した結果ですよ。少しは責任を取りなさい、これからが楽しみだわ」

薫の高笑いは一美・双葉・三波の絶叫が庭に響いた。

薫が円と進に歩み寄ってきた。

「円さん、車を用意させますから進を連れて帰りなさい。こんな頼りの無い馬鹿息子ですが宜しくお願い致します」

薫が円に深々と頭を下げた。

そして今、僕は円さんのマンションに居る事が理解できた。

昔から母は物事を達観して楽しむ癖があった。

厳しさの中にも何事も楽しんでしまおうとする母の笑顔を思い出した。

翌日、僕は円さんに無理矢理病院に連れて行かれて精密検査を受けさせられた。

検査結果は肋骨にひびが少し入っているが打撲のみで他は異常無しとの事だった。

「夫婦喧嘩も程ほどにな」

なんて事を医者が言って

「俺はヒグマか獰猛な猛獣か！」

と円さんが医者に殴りかかるのを必死に止める一幕もあったが病院を後にしてインフィニート出版に向う。

「なあ、コオロギ聞いても良いか？ コオロギのお袋さんが『今度は2人で遊びにいらっしやい』って言っていたがあれはどう言う意味だ？」

「そのままだと思いますよ」

「でもお前は……」

「？財閥を継ぐには？流古武道宗家の師範である事が最低条件なんです。僕は？流古武道宗家を破門され跡継ぎの資格を失った。でも香乃木家を絶縁された訳じゃない、たぶん母は姉さん達に継がせる気だったのじゃないですかね。母に直接聞いた訳じゃないので母の本意は判りませんが。今頃姉達が大騒ぎしていると思いますよ」

「そうなのか」

「はい、今度はきちんと母に紹介しますから一緒に遊びに行きまし

よう」

「あ、ああ。そうだな」

円さんが少し赤くなつた気がしたが何で赤くなつたのか判らなかつたので僕は歩き続けた。

インフィニート出版の大きなビルに入ると僕が始めて円さんに連れられて来た時より大騒ぎになった。

それは大騒ぎというよりインフィニート出版に激震が走つたという方が正しいのかもしれない。

インフィニート出版の従業員が右往左往して上へ下への大騒ぎになつてしまつた。

「嫌あああ！ ま、円さんが……」

「わ、私の円様が壊れた！」

「マヤ暦が終わるより早く地球が滅亡する」

なんてとんでもない事が聞こえてくる。

なかには円さんを見ただけで腰を抜かす女性社員も居るくらいだつた。

円さんは顔を引き攣らせながら歩いている。

僕は円さんの少し後ろを円さんの顔を見ながら歩いていた。

不思議な事に怪我だらけで包帯やガーゼで半分ミイラのような僕には誰も目を向けなかった。

編集室に着くと直ぐにコーヒーを飲んでいる鳴滝さんが見えた。

「おはようございます」

「オース」

「ブフォオオオオツ ゲフォ、ゲフォ、ゲフォ……」

鳴滝さんが盛大にコーヒーを噴出して立ち上がり啞然としている。

「編集長、素敵！」

絶叫しながら三つ編みメガネの宇多野さんが目をまん丸にしてお腹を抱えて爆笑した。

「編集長、目線下さい」

山男の常盤さんが一眼レフを構えて指を鳴らして野太い声で言った。
そして円さんの我慢が限界を突破した。

「て、テメエら！ お、俺がワンピース着たらそんなに可笑しいか？
？ いつもこいつもぶっ飛ばしてやる！」

円さんは僕がプレゼントした。黒いペイズリー柄のワンピースを着て出勤しただけでこの大騒ぎになってしまったのだ。
デスクだけが僕を見て心配そうに声をかけてくれた。

「大丈夫なのか？ コオロギ？」

「ご心配とご迷惑をお掛けしてすいませんでした」

「いや、そんな事はどうでもいいが。そのボロ雑巾みたいな怪我はどうしたんだ？」

「円さんと実家を出る為に百人組手みたいな事を」

「無茶しやがって、治るまで仕事は休んでいいぞ」

「大丈夫です。これからも宜しくお願い致します」

デスクに深々と頭を下げた。

顔を上げて入り口や廊下を見ると円さんのワンピース姿を見ようと黒山の人だかりが出来ていた。

「おい！ 円。いい加減にしろ！」

デスクが声を上げると一瞬で静かになり円さんがデスクを睨み付けた。

「い、今。な、なんて呼んだ？ クソ親父」

「お前が女の子の格好で仕事をするならアリスじゃなく円と名前で呼んでやる」

「2度とワンピースなんか着るか！」

「良いのか？ そんな事言ってそれは誰にプレゼントしてもらったんだ？」

「そ、それは……ごによごによ……」

「ああ？ よく聞こえないが？」

「こ、コオロギに……」

円さんが真っ赤になり俯くと地鳴りの様などよめきが起こり、円さ

んが暴走し始めた。

「俺様は、見世物じゃねえ！ どいつここいつも散りやがれ！」

「おい、コオロギ。お前しか止められないぞ」

「はあゝしょうがないなあ」

溜息をついて円さんの側に行く。

「円さん、少し落ち着いてください」

「み、皆。俺の事を馬鹿にして」

「馬鹿にしている訳じゃないでしょ。円さんがワンピースだから少し驚いているだけです」

「もう、2度と着ない」

「そんな事言わないでくださいね。凄く似合っていて可愛いですよ」

「か、可愛いって……下僕のコオロギの責任だからな！」

円さんがもの凄い顔で僕を睨み付けた。

構わずに円さんの手を握った。

「良いですよ、僕の責任で。僕の命尽きるまで円さんの下僕でいますから」

気が付くと編集室が水を打った様に静まり返った。

円さんは何を言われたのか判らない様な顔をしてポカンと僕の顔を見ていた。

「そ、それは、プ、プロポー……」

「命尽きるまで円さんの下僕で居るって言ったんです。駄目ですか？」

「駄目じゃない、いつまでも一緒にいてください」

円さんにキスをする。

円さんの瞳から涙が溢れ、僕に抱きついてきた。

轟音の様な歓声が上がリ。

本日2度目の激震がインフィニート出版に走った。そしてアリスとコオロギの新しい日々が始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5795t/>

アリスとコオロギ

2011年6月9日06時21分発行